

特259

523

生ける豊太閤



始



第259
523



馬井壽山人著

生ける豊太閤

— 豊太閤と天守閣 —



豊
公
會



豊太閤 畫像 (寶國) 京都 高臺寺藏

豊太閤夫人北政所が豊公薨去後その逝去まで二十六年の間、朝夕拜し居られし像と傳へらる。描線強く、彩色また鮮麗、眞に生ける豊太閤の面目躍如たるものがある。

自序

大^{だい}阪^{おほさか}の空^{そら}を壓^{あつ}して、昭和六年三月、大阪城新^{しん}天^{てん}守^{しゅ}閣^{かく}が再^{さい}建^{けん}された時^{とき}、西^{にし}に向^{むか}つて建^たてられたその壯^{さう}觀^{かん}を仰^{あや}いだすは、いつも友人^{ともだち}の誰^{たれ}彼^{かれ}をつかまへては「これはきつと西^{にし}に向^{むか}つて戦^{せん}争^{そう}があるぞ」といつたものだった。果^{はた}してこの豫^よ言^{げん}は的^{てき}中^{ちゆう}した。同年九月十八日、恰^{あた}も豊^{とよ}公^{こう}薨^{かう}去^{きよ}の三^{さん}百^{ひゃく}三^{さん}十^{じゅう}三^{さん}年^{ねん}の命^{いのち}日^ひ(太陽^{たいやう}曆^{れき}に換^か算^{さん}して)に滿^{まん}洲^{しゅう}事^じ變^{へん}が起^{おこ}り、次^{つぎ}いで今^{いま}次^じの事^じ變^{へん}となつて西^{にし}の方^{かた}大^{たい}陸^{りく}に向^{むか}つて皇^{こう}威^ゐ擴^{かく}大^{たい}の聖^{せい}軍^{ぐん}が、進^{すす}めらるるに至^{いた}つたのである。

而^{しか}して予^よはたままたま豊^{とよ}公^{こう}が、天^{てん}正^{せい}十^{じゅう}年^{ねん}六^{ろく}月^{げつ}十^{じゅう}三^{さん}日^{にち}、天^{てん}下^げ分^{ぶん}目^めの義^ぎ戦^{せん}を行^いひたる大^{だい}阪^{おほさか}府^ふ下^げ天^{てん}王^{わう}山^{さん}麓^{ろく}山^{さん}崎^{さき}にウイスキー工場^{こうじょう}を設^{せつ}立^{りつ}したここに端^{たん}を發^{はつ}し

て、豊公に就いて特に勉強する機会を得た。

そもそもこのウイスキー工場は、全世界市場を一手に掌握せる英國スコットランドのウイスキーを凌駕する、純粋ウイスキーを、日本に於いて醸造せんとして設立したもので、予にとつては實に天下分目の計畫であつた。爾來十六年、幸にしてこの事業は成功の緒につき、今日に於いては、日本に於ける唯一の醇良なるウイスキーを完成することが出来、日本の無限の天恵たる農産物を原料として製造し、第三國へも堂々と輸出し得る、世界に誇るべき優良なる純國産物を、ここに創造し得たのである。

予はこれを偏に豊公神靈の加護と感戴してゐる次第であるが、かくて更に豊公を研究したる結果、意外なる發見をなすに至り、ここに愈々豊公を

一層鄭重に祀らざるべからずとの信念を、固くしたのである。

即ち萬世の聖天子にましました。明治天皇が、明治維新の劈頭、大阪行幸の際、大阪に豊公を祀るべき恩命を下し給うたことがこれである。この恩命は予のみならず、その方面の識者以外には、あまり知られてゐないことであつた。

明治天皇の恩命の詳細は、本書中に繰返して謹述する所であるから、一讀して讀者は、その真義を領得せられるであらうが、畏くも明治天皇が豊公を祀れと宣うたのは、豊公を以て萬世人臣の模範と激賞せられ、上古列聖の偉業を繼承し奉れる大英雄と認め給うたからに外ならぬ。そしてそれは本文中に屢々謹辭し奉れる如く、維新日本の建設に役立つべき、偉大

なる人物を御待望遊ばされ、御言外に豊公を祀れば必ず豊公の神靈が働いて豊公の如き人物が得られることを信じ給うたからである。と拜察される。更にまたかくの如き人物の出現に依つて、維新日本の建設が完成されると信じ給うたからである。この御思召には、實にいひ知れぬ有難味があり、大阪人のみならず、全日本人の奉戴すべき恩命と信ずる。

而して 天皇が豊公を以て、上古列聖の偉業を継述せる英雄と認め給うたのは、皇威を擴大せんが爲に、豊公が雄大な大陸政策並に海洋政策を實施せんとしたからである。

されば今次の聖戦始まつてこゝに滿二年、皇軍將兵の勇猛果敢なる活動により、いまや日に日に大東亞の地圖が興亞の一色に塗りかへられつゝあ

るは、これひとへに 天皇の御秘威の然らしめ給ふところであるとはいへ皇威を擴大せんとした豊公神靈の加護も亦、決して輕からざるものがあることは疑なきところである。即ち豊公の神靈は時運到來せりと見て、興亞の機を靈示し、いまやまさしく興亞の聖業を翼讚せられつゝあるものと信ぜられる。

かくてまた國民の間にも、豊公の壮志を偲び、その雄圖を思ふの情が澎湃として湧き起りつゝあるは、頗る當然のことゝいはねばならぬ。予はもとより一衆の商賣であつて、史上の豊公を論ずる資格もなく、文を行ふにも亦拙劣の誇を受くべきは、既に覺悟するところである。しかも敢て茲に豊公を祀るべきことを提唱する所以は、明治天皇の聖旨を奉じ、興亞の長

期建設の上に、より強き豊公神靈の御加護を仰がんとするものに外ならぬ。即ち予は興亞日本の彌榮を願ふあまり、敢て豊公を祀るべきことを提唱し、よつてもつて皇恩の萬一に酬ひ奉り、同時に護國の忠靈を顯彰せんとする微意に外ならぬ。勿論説いて足らざるところ、誤れるところは、江湖の御高教を得ば幸甚である。

昭和十四年七月興亞記念日記す

鳥井壽山人

生ける豊太閤 目次

自序.....一

豊公の再来.....一

大阪の大恩人豊公と天守閣(一).....大阪の経済的使命の象徴(一).....天守閣の意義(二).....豊公の雄圖(三).....興亞の雄圖を發現(四).....大阪城の回顧(五).....天下の要地大阪(六).....天守閣の炎上(七).....天を仰いで模索(八).....切なる望酬いらる(九).....天守閣の再建(一〇).....天守閣再建の意義(一一).....豊公の再来(一二).....何が故に(一三).....豊公精神の再来(一四).....

豊公再来の意義.....六

大勢に着眼(一).....不可思議なる靈力(二).....老史家の至言(三).....興亞日本の宿命的使命(四).....豊公偉靈の再来(五).....豊公興亞の機を靈示す(六).....新天守閣は興亞の司令塔(七).....神力として再来(八).....

御大典記念の天守閣.....八

新天守閣の意義(一).....新天守閣は遊覽所ならず(二).....新天守閣の歴史館(三).....天守閣本来の意義(四).....城主の靈そこを離れず(五).....見えざる靈力の働き(六).....天守閣再興は動皇精神の表現(七).....動皇の偉人豊公の再来(八).....天守閣の御大典記念たる意味(九).....

明治天皇御製の豊公.....一一

明治天皇の御稜威(一).....關白秀吉についての御製(二).....明治天皇の御賞嘆(三).....おそるべしの御意義(四).....五ヶ條御誓文の御宸翰(五).....列聖の御偉業を継述し萬里の波濤を拓開し國威を四方に宣布せんとす(六).....列聖の御偉業を繼述せる豊公(七).....御宸翰の文と御沙汰書と合致す(八).....兩者僅かに五十餘日を隔つるのみ(九).....豊公への御回顧(一〇).....王政復古の意義(一一).....豊公祭祀の恩命下る(一二).....

豊公とその靈力

豊公に乗り移られた神靈の力(一五)……豊公の辛苦(一五)……豊公の偉業は豊公一個の力にあらず(一五)……豊公の偉業は列聖の御神靈の加護に依る(一六)……八紘一字の華國精神を奉體(一六)……神功皇后以來の御神靈の力(一六)……明治天皇の御神意(一六)……御偉業の繼承の意義(一七)……明治天皇の御製(一七)……神のまもり(一七)……その他の御神靈(一八)……北條時宗・織田信長公の神靈(一八)……國威發揚と豊公の偉業(一八)……大西郷の偉業(一八)……明治天皇東亞永遠の平和確立の爲立上らせ給ふ(一九)……今次の聖戰と御神靈の威力(一九)……皇軍の大勝利と統後の堅忍持久(一九)

無念のこもつた靈力

靈力の消長(二〇)……志半ばにして仆れたる人の靈力は後世を支配する力強し(二〇)……七度人間に生れ變る(二〇)……楠公の偉業(二一)……無念のこもつた豊公の靈力(二一)……後鳥羽天皇並に後醍醐天皇の御英靈(二一)……七百年並に六百年祭を迎へ奉る(二二)……國史に炳乎たる御神徳(二二)

歴世の御神靈と國威の發揚

國威發揚は御神靈の加護(二三)……おそるべしの御意義を拜察す(二三)……豊公と御神靈の加護(二三)……朝鮮への文書(二三)……豊公の神國日本の自覺(二三)……上杉謙信に鐵砲當らず(二三)……皇軍將兵の天祐(二三)……豊公は常勝の英雄(二三)……豊公戰術の定石(二三)……豊公は大軍神(二三)

豊公の武運を得たる所以

豊公の戦は義戦(二四)……皇威擴大の奉公戦(二四)……豊公とヒットラー(二四)……小牧、長久手の戦に於ける一部の敗戦(二六)……全局に勝つ(二七)……朝鮮征伐の常勝(二七)……朝鮮征伐の眞意義(二七)……従來の辭説を排す(二七)……國策の戦(二七)……山鹿素行の説(二八)……豊公の朝鮮征伐は蹟武弄兵に非ず(二八)……朝鮮の人にいろはを用ひしめんとす(二八)……北京に天皇を迎へ奉らんす(二九)……豊公の興亞建設の方策(二九)……大皇國建設の大志(二九)

(二九)……海外發展の方策(二九)……時運到來せず(二九)……豊公理想の實現(三〇)……豊公の偉業皇威を翼賛加護し奉る(三〇)

神靈としての豊公

史家の認むる豊公の偉業(三〇)……世界史上に輝く桃山文化(三〇)……豊公は靈忠報國の人(三一)……公人としての豊公(三一)……豊公とムツツリニ(三一)……神としての豊公は公人である(三一)……公人と私人との混同(三一)

護國の英靈を祈る所以

人間の神格との相違(三二)……私人としての英靈(三二)……戦争は公事(三二)……英靈は國家の公神(三二)……英靈に私的性質なし(三三)……神社が國家の宗祀といはるゝ意義(三三)……神とその國家的意義(三三)

豊公の遺命と豊國廟

難波を思ひつゝ薨去(三五)……豊公薨去の場所は桃山御陵の地に當る(三五)……明治天皇親ら地を相し給ふ(三六)……明治天皇御愛讀の御書(三六)……天皇の興亞の聖業(三六)……豊公の偉業天皇を迎へ奉れるか(三六)……豊公 明治天皇の御英靈を護り奉る(三七)……豊公の遺命(三七)……御所に向つて埋めらる(三七)……阿彌陀ヶ峰(三七)……比叡山と並んで國家を鎮護す(三七)……豊國廟(三八)

豊國 大明神

神號を贈らる(三九)……後陽成天皇の宣命(三九)……兵威を海外に振ひ恩澤を率士に施す(三九)……豊國大明神の神號(三九)……永遠に天皇朝廷を護り賜へ(三九)……宣命譯解(三九)……後陽成天皇の恩命(四〇)……豊國山(四〇)……豊國廟城(四〇)……豊國大明神臨時祭屏風(四一)……豊公祭祀はわが神祇史上の一大先例(四一)……身骨を埋めて國家を守る(四二)……神としての豊國の意義(四二)……國家公認の豊公の精神(四二)……正遷宮祭(四二)……正一位を贈らる(四二)……豊國は豊原原瑞穂の國の略稱(四二)……豊國の國家的意義(四二)

豊公の偉業と明治維新

……

徳川時代初期の豊公の偉業(三三)……徳川光圀と豊公顯彰(三四)……光圀の勤王精神との合致(三五)……豊公の國體
明徴の事實(三六)……水戸學派と征韓偉略(三七)……英雄の出現を待望(三八)……豊國廟再興の聲(三九)……再興の意
義(四〇)

豊公祭祀の恩命

四五

皇政復古(四一)……明治維新の幕切つて落さる(四二)……明治天皇の大阪行幸(四三)……大阪に賜はれる豊公祭祀の
恩命(四四)……御沙汰書(四五)……經國の大綱(四六)……上古列聖の御偉業を繼述し奉る(四七)……豊太閤の魂治ご飯
んさす(四八)……豊太閤の如き人を得させられたき御恩召(四九)……豊太閤の祠宇を造り、その大勳を萬世不朽に
垂れさせ給はんさす(五〇)……御沙汰書謹解(五一)……御沙汰書附屬文書(五二)……明治天皇の御恩召(五三)……當時
の日本は累卵の危きにあり(五四)……當時の歐米列強(五五)……歐米各國侵略の覺手を延ばさんとす(五六)……明治
天皇の御待望(五七)……明治天皇豊公を祀らせ給ひし御意義(五八)……人心の一新(五九)……萬里の波濤を拓開せん
とし給ふ(六〇)……上古列聖の御偉業を繼述し給はんがために豊公を祀らせ給ふ(六一)……木戸孝允公の發議(六二)
……京都へ還幸(六三)……大阪への第一の勅命(六四)……大阪人の感激(六五)

豊國廟再興の恩命

五四

豊國廟再興の御沙汰書(五四)……太閤は撥亂反正翼合其功績六合に亘る(五五)……萬世人臣の模範(五六)……天下
衆庶を手傳はしめらる(五七)……官祭の御執行(五八)……御祭文(五九)……豊國の神の稜威(六〇)……墓所修造(六一)……
……大御世を守り賜へ(六二)……大勳功を立て大事業を起さしめ賜へ(六三)……御祭文謹解(六四)……明治天皇の大御
心による豊公偉業の再生(六五)……豊公は國家の公神(六六)

京都豊國神社

五七

別格官幣社京都豊國神社の略沿革(五七)……豊公墓の委管(五八)……方廣寺大佛殿址に再興(五九)……明治天皇の御
恩召(六〇)……豊國廟城を附屬地とす(六一)……豊國會と豊公墓の改修(六二)……墓城(六三)……豊公墓の五輪塔(六四)

廟址大岡垣(五九)……豊國神社の境城と國家安康の鎮(六〇)……豊公安らかに鎮まり給ふ能はず(六一)

大阪豊國神社

六〇

大阪府社豊國神社の略沿革(六〇)……初め京都の別社として創建(六一)……初めの境城(六二)……天守に向ひ東面し
て建てらる(六三)……神域狼狽を加ふ(六四)……神威甚だ振はせ給はざる觀あり(六五)……移建(六六)……獨立(六七)……
……現在の社殿(六八)……南面に變へらる(六九)

豊公の神罰

六三

大阪市中央公會堂の建設(六三)……某氏の百萬圓の寄附(六四)……大阪市中央公會堂の偉容(六五)……某氏の自殺
(六六)……神罰觀面(六七)……高野山の豊公一族の墓(六八)……某氏豊公墓城を整理し自らの墓を築く(六九)……某商
會の没落(七〇)……史蹟豊公一族の墓の現状(七一)……高野山復興の大恩人豊公の墓高野山になし(七二)……獻燈な
く荒れ果たり(七三)……豊公一族の墓の復舊(七四)……神怪なる因縁を説くものに非ず(七五)……豊公の神靈を祀り
熱誠を捧げよ(七六)……いかに豊公を祀るべきか(七七)

豊公を海外の神社に奉祀せよ

六八

海外に奉祀せよ(六八)……豊公の無念を遂げしめよ(六九)……興亞の聖業を遂行する所以(七〇)……海外にある日本
人の精神的依歸たらしめよ(七一)……豊公は長期建設の人(七二)……豊公を手本とせよ(七三)……明治天皇の御遺志
に副ふ所以(七四)……神社局への提唱(七五)……海外にある日本人はその分靈を奉祀せよ(七六)……かくて外人との
摩擦を克服すべし(七七)

京都豊國神社の移建

七一

豊公は京都の人柱(七一)……京都の復興(七二)……豊公の勤皇事業の一端(七三)……京都の面目を一新す(七四)……京
都の繁榮を計る(七五)……一時的繁榮策(七六)……現豊國神社の社地に不適當(七七)……慶長へ復古して壯大なる桃
山式社殿を造營せよ(七八)……報效精神の發揚(七九)……明治天皇の聖旨を奉戴する所以(八〇)……豊公遺蹟の顯

皇都東京に豊國神社を建設せよ

豊公の京都を復興した所以(七四)……豊公は皇都を護る(七五)……日も夜も天皇を守り奉る(七五)……近世都市江戸の開発は豊公の着眼(七五)……豊公家康公を説く(七五)……家康公江戸城築城について豊公の教を請ふ(七五)……従來の僻説(七五)……當時の江戸(七五)……江戸を勤めし所以(七五)……江戸城回顧(七五)……江戸は豊勝の地(七五)……豊公の真意(七五)……當時の真相(七五)……人材抜擢の高邁なる識見(七五)……家康公の江戸移封(七五)……豊公の先見の明(七五)……豊公の偉業明治天皇を東京に導き奉れるか(七五)……神のなし給ふことは神のみ知り給ふ(七五)……東京豊國神社建設の提唱(七五)

大阪豊國神社と天守閣の回顧

明治天皇聖旨に副ひ奉れ(八〇)……石山本願寺(八〇)……寺内町(八〇)……石山合戦(八〇)……信長公の薨去(八〇)……豊公の大阪築城(八〇)……フロイスの報告(八〇)……皇都の守護(八〇)……世界發展の發足地(八〇)……北向八幡の勸請(八〇)

天守閣と運命

天守閣築造の目的(八三)……天守閣は城主の運命を象徴す(八三)……豊公の柴田征伐(八三)……運を開かん爲めの天守閣(八三)……天守閣の裝飾とその意義(八三)……領主權の發動(八三)……安土城天守閣(八三)……大阪城天守閣の構築(八三)……大阪陣屏風に見ゆる天守閣(八三)……萬人を懾服せしむ(八三)……豊公の海外發展の英志を象徴す(八三)……現在の天守閣の虎の繪(八三)……明治以後の日本の發展(八三)

明治の日本と國威の發揚

豊公三百年祭(八八)……史實より見たる豊公(八八)……豊公は個性發揚の最大模範(八八)……明治・大正の日本(八八)……昭和日本の發展(八八)……豊公偉業の活動を感得す(八八)……天守閣は日本の進路を示す(八八)……天守閣西面の意義(八八)……仁徳天皇孝徳天皇の大阪遷都の御意義(八八)……四天王寺の意義(八八)……豊公の墓も亦四面す(八八)

豊公の偉業を顧る

時運到来す(九二)……滿洲事變勃發の日は豊公三十三年の命日に當る(九二)……自主外交は豊公の眞面目(九二)……天守閣は祖國日本の意志を明示す(九二)……豊公の分靈皇軍將士に乗り移れり(九二)……豊公の朝鮮役を顧る(九二)……唐人(九二)……豊公の神國日本の自覺(九二)……豊公と大義名分(九二)……加藤清正の勇戦(九二)……豫備工作完了す(九二)……今次の戦果と豊公の偉業(九二)……長期建設と豊公の加護(九二)

聖戦と御神靈の加護

聖戦と皇軍勇士の奮戦(九五)……大東亞の建設(九五)……東亞永遠の平和來る(九五)……御稜威と皇軍奮戦の賜(九五)……忠勇の發露は御神靈の加護(九五)……御神靈は天皇を眞實し奉る(九五)……御神靈は大御心のままに將士を助け給ふ(九五)……一秒も將兵の心を離れ給はず(九五)……銃後國民への加護(九五)……國民精神總動員の實果は神靈の加護(九五)……上御一人に向ふ心(九五)……滅私奉公は神靈加護の現れ(九五)

御神靈と大和魂

神靈の加護は事ある時にあらわる(九九)……東亞の聖主明治天皇神のまもりを感知し給ふ(九九)……御神靈は大和魂なり(九九)……御神靈は總合歸一せる力(九九)……總親和の靈力天皇を扶翼し奉る(九九)……中心を守る神靈(九九)……豊公の偉業と皇國の運命(九九)

豊公とその時代

豊公の歴史は書き改めよ(一〇一)……時代の生んだ英雄(一〇一)……桃山時代と豊公(一〇一)……仰げば高し豊公の全容(一〇三)……國威八紘に輝く聖世(一〇三)……豊公は蘇れり(一〇三)……豊公の靈來り移る(一〇三)……分靈の威力(一〇三)……豊公の偉業は總靈力の綜合(一〇三)

豊公の大東亞建設の根據地

文武内外の大事業(一〇四)……全東亞を打つて一丸とせんぞす(一〇四)……豊公は八紘一字の皇國精神を奉戴す(一〇四)

……豊公は言挙げせず(一〇五)……豊公は三傑以上(一〇五)……大阪は豊公によつて大東亞建設の根據地たる使命を
賦與さる(一〇五)……大阪に生くる豊公の偉業(一〇五)……豊公の偉業を天守閣の下に祀る(一〇六)……興亞の大業完遂
を祀る(一〇六)……熟禱を捧ぐることは神靈の力を増し給ふ所以(一〇六)

豊公と大阪……………一〇七

大東亞の大阪(一〇六)……世界の大阪(一〇六)……大阪に着眼せる豊公(一〇六)……興亞の先驅者豊公(一〇六)……大阪に
豊公を祀る所以(一〇六)……大阪人の聖業翼賛(一〇六)……大阪人に靈驗を垂れ給はん(一〇六)……明治天皇の世界發展
の大御心に副ひ奉る所以(一一〇)……提唱(一一〇)

大阪豊國神社移建・造營の提唱……………一一〇

大阪府下唯一の豊國社(一一〇)……神城狹隘(一一〇)……豊公の靈に相濟まず(一一〇)……神靈の威力現るゝ能はず(一一一)
……移神の提唱(一一一)……神を祀る所以(一一一)……神城ふさはしからざる時は靈驗を示し給ふ餘地なし(一一一)……
官民有志の奮起を希ふ(一一一)……目下の急務(一一一)……國にこゝろをつくさしめ給はむ(一一一)

我等の願事……………一一三

各地豊國神社の造營又は整備(一一三)……豊公顯彰はむしろ遅すぎた(一一三)……しかし今からでも遅くはない(一一三)
……今日より直ちに實行に移したし(一一三)……豊公を海外に奉祀する提唱(一一三)……豊公顯揚の一大綜合國民
運動(一一三)……豊公三百年祭を迎ふ(一一三)……國民大衆は積極的に豊公に祈れ(一一三)

豊公精神の顯彰と發揚……………一一五

豊公の降誕と加護を得せしむ(一一五)……國につくすまゝ(一一五)……人としての豊公(一一五)……豊公は天真爛漫の
自然人(一一五)……機智縱横の人氣者(一一五)……豊公は靈忠至孝の人(一一五)……跟蹤日本の先驅者(一一五)……最も待
望さるゝ人物(一一五)……蘇峰翁の卓見(一一五)……金よりも人、人よりも魂(一一五)……本當の人間の魂が一國の魂と
なる(一一五)……豊公の偉業全東亞に蘇らん(一一五)……豊公精神は即ち奉公精神(一一五)……豊公を祀れと絶叫す(一一五)

桃山文化の復興を期す……………一一九

世界史上に輝く桃山文化(一一九)……短を捨て長を採る(一一九)……桃山文化の特徴(一一九)……社會は元氣に滿つ(一一九)
……大國民としての日本人の面目(一一九)……の意氣込は興亞日本の原動力(一一九)……金銀産出の時代(一一九)……
商賣繁昌・産業發展を極む(一一九)……興亞の聖業は産業から(一一九)……文藝復興の時代(一一九)……精神日本の世界
指道(一一九)……天皇中心主義と豊公精神(一一九)……祭政一致の國風を發揚(一一九)……國史に基づく國民士氣の鼓舞
(一一九)……忠靈顯彰・國體明徴運動

巻頭口繪

豊太閤畫像(國寶・京都高麗寺藏)

挿畫

復興大阪城天守閣最上層金鯱(一二〇)……南西隅より見たる復興大阪城天守閣の偉容(一二〇)……豊公の青年時代(一二〇)……
……西本願寺書院(一二〇)……後陽成天皇宸筆豊國大明神勅額(一二〇)……創建當時の豊國廟(一二〇)……明治初年の荒廢せ
る豊公の墓(一二〇)……大阪へ賜はれる御沙汰書寫(一二〇)……現在の阿彌陀峰頂上の豊國廟(一二〇)……大阪豊國神社の
現状(一二〇)……高野山豊公一族の墓(一二〇)……大御政所逆筋墓(一二〇)……豊國廟址太閤垣の現状(一二〇)……大阪城舊觀
(一二〇)……復興大阪城天守閣勾欄下の伏虎(一二〇)……復興大阪城天守閣(一二〇)……豊臣秀頼公筆豊國大明神號(一二〇)……
……豊公金印(一二〇)……巨石に偲ぶ豊公の大志(一二〇)……京都大佛殿址巨石(一二〇)……右方向(一二〇)……京都阿彌陀
ヶ峰頂上豊公の墓(一二〇)

生ける豊太閣

—豊太閣と天守閣—

鳥井壽山人

豊公の再来

興亞日本の心臓として、絶えざる躍進をつづけつゝある大大阪の空を
歴して、すつくとばかり聳え立つ大阪城天守閣の颯爽たる姿は、實に大
阪をして今日あらしめた大恩人たる豊太閣の雄圖を、さながらに物語る
ものである。

その天守閣の頂から、燦然たる光を放ちつゝある金色の鯨は、あたかも
金の都大阪の経済的使命を象徴するかの様に見える。

大阪の大恩人豊
公と天守閣

大阪の経済的使
命の象徴

天守閣の意義

而して天守閣は、昔は戦時に於ける物見であり、司令塔であると共に、城主の戦はんとする意氣込を示し、或はその發揚せんとする雄圖そのものを表現する大建造物であつたこと

豊公の雄圖



大阪復興天守閣最上層金龍

の興亞の雄圖を、具體的に發現せるものといふことが出来るのである。

興亞の雄圖を發現

大阪城の回顧

顧るに、大阪城は今を去る三百五十年の昔、豪氣一世を蓋うた豊太閤が、その生涯の出世戦といはれ、或はまた太閤の關ヶ原といはるゝ山崎、賤ヶ岳の戦の後、その出世の眞最初に、前面に大陸につゞく海洋を控へ、背後に帝都を負うた天下の要地大阪を根據地として、全國を統一して大御心を安んじ奉り、國威を海外に發揚して皇威を八紘に及ぼさんが爲に、心血を注いで築き上げた、金城湯池を誇る天下の名城であつた。

天下の要地大阪

天守閣の炎上

しかし慶長十九年大阪冬の陣の後、まづ内外の堀を埋められて、その手足をものがれ、遂に元和元年五月八日（太陽曆六月四日）夏の陣の終幕と共に、秀頼・淀君等を葬り去つた炎々たる業火になめ盡されて、太閤の雄圖を具現した五層の大天守閣も惜しいかな、悉く灰燼に歸し、地上から全く影を沒して了つたことも、人のよく知るところである。

その後、大阪の空に天守閣の英姿を仰がざること、實に三百二十一年生れ變り、死にかはる幾百萬の大阪人は、父祖の話を傳へ聞き、天を仰

天を仰いで摸索

切なる望酬いら

いて天守閣を模索し、眼を閉ぢて天守閣を夢見つゞける有様であつたが、遂にその切なる望は、酬いらるゝ時が來たのであつた。

天守閣の再建

それは實に不思議なめぐり合はせといつてよいであらう。

今上陛下の御即位の大典を永久に記念し奉り、昭和の大御代を壽がながため、全大阪市民の賛助の下に、昭和六年三月天守閣は再建され、こゝに我々は再び、朝に夕に、なつかしき豊公の天守閣を仰ぎ、常に豊公の壯大なる意圖を、さながらに思ふことが出来る様になつた。これ實に昭和の聖世に生を享けた、大阪市民の最も大きな誇りといはねばならぬ。

天守閣再建の意義

しかも西の方、大陸に向つて建てられた堂々たるこの天守閣には、上記の如く豊公が國威を世界に輝かし、思ふ存分に海外飛躍をなさんと志した大和魂を打込んだのである。それはまた太平洋行進曲に「海の民な

豊公の大和魂蘇

ら男ならみんな一度はあこがれた」と歌はれる太平洋への進出の憧憬を寓したのもいへよう。さればかゝる意義を有する天守閣を再建せんとした大阪市民は、言はず語らざる裡に、右の如き豊公の大和魂を、再び大阪の地に蘇らせたいといふ熱望をこめて、再建に努力したことはいふまでもない。

豊公精神の再来

即ち大阪市民が、特に御大典記念として、天守閣の再建を望んだのは、全く昭和の聖世に於ける豊太閤の再生・再来を望んだからに外ならぬ。さればこの意味よりすれば、天守閣の再建は、實は全大阪市民が、待ち望んだ豊公精神の再現であり、正しく豊公の再来といふべきである。

何が故に

然り、大阪城の新天守閣は、正しく豊公の再来である。然らば豊公は何が故に、この昭和の聖世に再来したのであるか。

大勢に着眼

我々は天守閣の再建といふ事實の表面ばかりを見てゐないで、少しく立入つて眞の原因を明らかにせねばならぬ。

人間は無力なものであるから、たゞ物事の表面ばかりを見て満足してゐるが、見えざる不可思議な因縁とも言ふべき大きな力が、世の推移の裏には、常に働らいてゐることは、少しく深く大勢に着眼するものにとつて、實に明かなことである。このことは、最近発行された昭和國民讀本最後の章に、徳富蘇峰翁が「運命の神と日本の前途」と題して述べた中に、「遠き古代は言はず、著者の生存したる最も近き七十餘年間の歴史を回看すれば、我が日本國は、或る不可思議なる靈力によりて或る方向に向つて導かれつゝあるが如く感知する、我が日本は、今や自ら既定の宿命に従つて、既定の目的に向つて、運動しつゝあるものゝ如くに感知する。」といつてゐるのでも、知ることが出来るであらう。

即ちこれこそ實に、年既に古稀に及んで、しかも愛國の至情とゞむる能はず、日々健筆をふるつて、近世日本國民史を執筆しつゝある老史家が、胸奥深く藏せられる透徹した洞察の結果から、發せられた至言といふを得べく、こゝに翁のいふ所謂不可思議なる靈力とは、以下に述

不可思議なる靈力

老史家の至言

興亞日本の宿命的使命

豊公偉靈の再来

豊公興亞の機を靈示す

べんとする所謂御神靈の力であり、また既定の宿命とは、即ちこの御神靈の力によつて導かれつゝある、興亞日本の宿命的使命であるといはねばならぬ。

されば大阪城天守閣が、右にいへる如く昭和六年三月を以て、竣工した所以も、直ちにその半歳後に起つた滿洲事變と思ひ合せ、更に續いて上海事變・滿洲國の獨立・國際聯盟の離脱・其他の重要事件を経て、今次の聖戦に至つたことに思ひ及ぶ時、そこに何等か見えざる不可思議なる靈力の、導き給ふものがあることを、はつきりと感知せざるを得ないのである。

乃ち我々はこゝに思を潜むる時、昭和の聖世に於ける大阪城天守閣の再建は、豊公の偉靈が、遂に東亞の大勢を展望しつゝあつて、今こそ日本が興亞の大業に進出すべき時ぞと、その機運が熟し、その準備が正し

新天守閣は興亞の司令塔

神力として再来

く完了した爲に、出来たものといはねばならぬ。即ちそれは後記する如く豊公が自ら列聖の御偉業を継述し奉り、天下にその事を號令すべき司令塔として、天守閣を再建せしめ、かくて自ら再来されたものと信ずるのである。換言すれば天守閣の再建は、豊太閤の偉業が、この昭和の大御代に、強くも働きかけ、興亞日本の使命の達成を導き給ふ神力として再来されたものであると信ぜられるのである。

御大典記念の天守閣

右の如き意味なくして、いかにして炎上以來三百餘年を経た昭和の御代に、突如として、天守閣が再建される筈があらうか。即ち昭和の御代に於いては、もはや天守閣の如き封建時代の設備に、何等の軍事的意義をも見出すことは出来ぬのである。かゝる意味に於いては、この新天守

新天守閣の意義

新天守閣は遊覽所ならず

新天守閣の歴史

天守閣本来の意義

城主の靈こそを離れず

閣は全く無用の長物である。

然らばまた再建當時一部の人士が考へた様に、これは單なる遊覽の爲の新名所として、名所の少い大阪に、觀光客を誘致したり、有閑子の眼を樂ませたりするだけのものだつたらうか。とすれば御大典記念の意義ある建造物としては、實に恐れ多いことである。

而して今日大阪城天守閣の各階は、歴史館として公開せられ、常に有意義な展覽が行はれてゐる。これは全く豊公の古を偲び豊公の偉業を仰がしむる上に、大いに役立つ事業であるからこれこそ眞に豊公の神靈の然らしめ給ふところといふを得べく、かくて豊公の偉業は、愈々明瞭となり、一般の人士の豊公に對する認識も益々深くなりつゝあるのである。

しかしなほ、我々の考ふべき問題は、天守閣が本来具有せる意味に就いてである。即ち天守閣はもともと遊覽の場所でもなければ、展覽會場でもない。後記する如く、それはまた城主の運命を象徴し、城主の靈が常にそこを離れず、永久にこゝに留まる所の聖場である。かくの如き意味を有する天守閣が、再建されるに就いては、たとへ當事者は無意識で

見えざる靈力の働き

あつたとしても、それを再建させるだけの、見えざる隠れたる靈力が、働らきかけられたものとせねばならぬ。

天守閣再興は勤皇精神の表現
勤皇の偉人豊公の再来

されば御大典を記念し奉るといふ意味からだけいへば、他の諸都市に於いて行はれた様な、種々な計畫が、大阪にもあつた筈である。しかも大阪に於いては、敢て他の記念方法が採用されず、天守閣の再建が實現したのである。これはいふまでもなく、豊公が終始勤皇の偉人であり、至誠奉公の念より、内、國内を統一して當時の帝都を護り、外、國威を發揚せんが爲に、大阪城天守閣を築いた遺志を體して、これを再興することが、直ちに大阪人の御大典を壽ぎ奉る意味となつたからに外ならぬ。即ちこゝに勤皇の偉人としての豊公の神靈が、再来されたものと考へることが出来るのである。

天守閣の御大典記念たる意味

そしてまたかく考へなければ、今上天皇の御陵威を壽ぎ奉る御大典の記念としては、一見或は全く無関係とも思はれ、或は全く不似合とさへ考へられる様な、普通封建的意味を持つものとされる天守閣が、殊更に再建された所以を、解明することは出来ないであらう。然らば豊公は、何が故に新天守閣と共に再来されたのであるか、更にその由つて来る所以を考へて見よう。

明治天皇御製と豊公

明治天皇の御稜威

而してこゝに思を潜めて、豊公の再来せる所以を思ふに、これ全く明治天皇の深き御思召に依つて、その機運が熟し、時節が到來したからである、信ぜられるのである。即ちその四十六年の御治世に、國威を世界に發揚し給ひ、極東の一隅に邊在せる島國日本を、世界の中心たる日本に躍進せしめ給うた、明治天皇の御稜威は、國民の等しく景仰し奉るところであるが、その、明治天皇は「關白秀吉」と題せられた、明治十七年

關白秀吉についでの御製

の御製に

くまといひとらといふともおそるへし

國にこゝろをつくす此の人

明治天皇の御賞

おそるべしの御意義



西南隅より見たる大阪城天守閣の容体

と詠ぜられた。拜誦して直に知られる如く「國にこゝろをつくした人」として、特に天皇は豊公を賞讃し給うたのであつて、豊公の偉勳を偲び給ふ優渥なる大御心のほどは、まことに畏き極みと申さねばならぬ。然らば、天皇は何が故に「おそるべし」と仰せられたかといへば、それは豊公の内外に渉る功業が、非常に大であつたことを

五ヶ條御誓文の御宸翰

列聖の御偉業を繼述し萬里の波濤を拓開し國威を四方に宣布せんと宣ふ

列聖の御偉業を繼述せる豊公

御宸翰の又と御沙汰書と合致す

回顧せられたからであることはいふまでもない。

是より先、恰も明治元年三月十四日、明治天皇は京都御所紫宸殿に於いて、五ヶ條の御誓文をお示しあらせられ、同時に御宸翰を下し給ふて朕こゝに百官諸侯と廣く相誓ひ、列聖の御偉業を繼述し、一身の艱難辛苦を問はず、親ら四方を経營し、汝億兆を安撫し、遂には萬里の波濤を拓開し、國威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置かんことを欲す

と仰せられたのであるが、こゝに恐懼に堪へないのは、同年閏四月六日、大阪行幸の際、初めて豊公を大阪に祀るべく賜はつた御沙汰書（後に謹載す）の中に、豊公を以て「上古列聖之御偉業を繼述し奉り、皇威を海外に宣べ」と御嘉賞あらせられた御言葉と、天皇の御英志を宣べ給うた右の五ヶ條の御誓文の御宸翰の中にある「列聖の御偉業を繼述し（中略）國

兩者僅かに五十餘日を隔つるのみ

豊公への御回顧

王政復古の意義

豊公祭祀の恩命下る

威を四方に宣布し」の御言葉とが、御意味に於いて全く一致し、御言葉までが殆んど同じであらせられることである。しかも此の五ヶ條の御誓文と豊公祭祀の勅令は、その御發布の日が、僅かに五十餘日を隔てさせ給ふばかりであるのを見ても、天皇の御思召を拜察するに難くはない。即ち内に外に最も多事多難を極めた幕末の難局を打開して、七百年の武家政治を一朝に廢せしめ給ひ、御齡僅かに十六歳の御身を以て、王政復古の大業を御遂行遊ばされた明治天皇は、豊公の内々に亘る大功業を忘れ給はんとしても、遂に忘れ給ふ能はず、最も強く御腦裡に豊公を顧み給ひ、その加護を願ふところあらせられたものと拜察されるのである。さてこそ天皇は五ヶ條の御誓文を御示しあらせられた五十餘日後に於いて、早くも豊公に對して優渥なる御沙汰を賜ひ、改めて豊公の偉業を

豊公に乗り移られた神靈の力

豊公の辛苦

豊公の偉業は豊公一個の力にあらず

神として大阪に祭祀すべき勅令を下し給ひ、更に京都の豊公の廟を復興すべきことを命じ給ふたのである。

豊公とその靈力

思ふに豊公が絶世の偉業をなしとげた大きな力は、決していはゆる人間業ではなかつた。そこに強い、そしてまた澤山の御神靈が、豊公に乗り移られ、その御神靈の力に依つて、豊公の偉業が遂げ得られたものと信ぜられる。「ローマは一日にして成らず」といふ諺がある様に、豊公も亦、艱難辛苦して、出世の緒をつかみ、遂に成功した苦勞人ではあるが、豊公があれ程の大業をなしとげた力は、決して豊公が直接その父祖から受けついで、自分一個の力だけで、出來たのではないことは、誰にも分ることである。

豊公の偉業は列聖の御神靈の加護に依る

八紘一字の肇國精神を奉體

神功皇后以來の御神靈の力

明治天皇の御神意

即ち豊公の國內平定並に大陸經營・太平洋への進出の大志は、遠く遼れば、天照大神の御神勅を奉戴して、神武天皇がわが帝國の基を固めさせられて以來、畏れ多くも、その八紘一字の肇國精神を御繼承遊ばされた、歴代天皇の御志を奉體したものに外ならぬ。
殊にまた、神功皇后の三韓御征伐以來、一貫して歴代の天皇が抱懷遊ばされた國威御發揚の、強くも亦多い御神靈の力が、豊公の上に乗移り給ひ、豊公にかくの如き大業をなさしめられたものと、拜察されるのである。

かくいふと、人或はこれを不可解な説をなすものと、いふかも知れないが、實にこれは當時、現人神にましました明治天皇の御神意に依つて、明かにされたことなのである。即ち天皇が豊公を大阪に祀るべく賜はつ

御偉業續述の意義

明治天皇御製

神のまもり

た御沙汰書に、先にもいへる如く豊公を「上古列聖之御偉業を繼述し奉り皇威を海外に宣べ」たものと、御賞嘆あらせられたことに依つて、最も明白に證明出来るのである。而して上古列聖の御偉業を繼述し奉ることとは、列聖の御神靈の加護に依らなければ、どうして出来よう。
されば、天皇が日露の大國難に當つて

世の中にことあるときそしられける

神のまもりのおろかならぬは（明治三十八年）

と詠ぜられた時には、恐らく天皇は、その大御心に、上古列聖の御偉業を繼述し奉つた豊公の神靈のまもりをも、必ずや嘉納し給ふたこと、拜察されるのである。

更に近古以來に就いていへば、豊公の大陸經營、海外發展の大業の上

その他の御神靈

北條時宗・織田
信長公の神靈

國威發揚と豊公
の偉靈

大西郷の偉靈

には、元寇を殲滅して神國日本の眞面目を發揮し、且つ高麗を討ち、元を逆襲せんとまでした、かの北條時宗公の神靈も働らいてゐられたであらうし、また直接には、無念を呑んで本能寺に自刃した、信長公の神靈も豊公に乗り移つて、これを果さしめたこと、信ぜられる。即ち豊公の海外發展の大志は、恰も豊公が國內平定の事業に於いて、信長公の志を繼いだ如く、矢張り信長公の志を繼いだのであるといふのが、學界の定説であるからである。その他恐らく無数の神靈が、豊公に乗り移られて、周知の如き大業をなさしめ給うたものと信ぜられるが、豊公の薨去後は、豊公もまた神靈として此等の神靈と共に、後記の如くわが國威の發揚に盡されたこと、思はれる。

かくて明治初年に及んでは、征韓論に敗れた大西郷の偉靈の如きも、わが國威の發揚に大い

なる力を添へてゐられる事であらう。

ともあれ、此等の無数の御神靈の力が、時期が熟したと見給ふや、即ち明治天皇の御稜威を助け奉り、こゝに天皇は、東亞永遠の平和確立の爲に、日清・日露兩役はいふに及ばず、日韓併合を斷行し給ひ、大正・今上兩天皇またその御遺志を承け給うて、遂に今次の聖戦に及び、正しくその實果をあげんとし給うたものと拜察されるのである。

かく觀じ來れば、今次の聖戦に於いて、我が皇軍將兵が、幾多の天祐を得、向ふ所敵無く非常な大勝利を得たことにも、亦銃後國民が上下一致して、よく堅忍持久の態勢を持續し得ることにも、強き御神靈の力を感得せずにはゐられないのである。

明治天皇東亞永遠の平和確立の爲に上らせ給ふ

今次の聖戦と御神靈の威力

皇軍の大勝利と銃後の堅忍持久

靈力の消長

志半ばにして
はれたる人の靈力
は後世を支配す
る力強し

七度人間に生れ
變る

無念のこもつた靈力

さてここに一つの大きな目的を持つて活動した偉大な靈力も、その目的を貫徹し終ると、その靈力はもはや弱きものとなる。これに反して、偉大な人物があつて、その目的が達せられず、思半ばに死んで、靈となつた時、その無念のこもつた靈力は、非常に力強い働きを持つものである。

即ち予の信ずる所によれば、同じく神靈と申上ぐるけれども、志半ばにして仆られた偉人・英雄の神靈・靈力は、一入後世を支配する力が強いのである。

かの七度人間に生れ變り、朝敵を滅さんといつて湊川に戦死された大楠公兄弟の靈は、かゝる無念のこもつた靈力の強さを物語る、最もよい例といつてよからう。大楠公のいはれた七度とは、悉度の意で、無数にくりかへすことである。

楠公の偉靈

無念のこもつた
豊公の靈力

後鳥羽天皇並に
後醍醐天皇の御
英靈

果せるかな、楠公の神靈は、朝敵を打たんとする何萬何億の勤皇の士となつて生れ變り、國史の上に幾多の義烈を遺し給ひ、今日なほ國民各自の上に生きて働き給ふのである。

或はまた自分は弱い身であり乍ら、力の幾十倍する強い相手の仇敵を討ち取つた敵討の例が、古來史上に澤山現はれてゐるのも、これ即ち無念のこもつた靈力の導きによつたものと、説明せねば説明の方法がないのである。

而して、豊公の靈力も亦、かくの如き無念のこもつた神靈として、強き働らきを有し給ふたことは、充分考へられるのである。

即ち豊公の計畫された眞實の事業は、完成したのではなく、實はこれからであつた。周知の如く豊公は、天旨を畏み國內の平定は完成したが、その大陸政策や海洋政策に於いては、漸くその入口に入りかけたに過ぎなかつた。だからこの國威發揚を志した豊公の偉靈は、その薨去後、果し遂げられなかつた強い無念のこもつた靈力と化して後世に及び、時期が熟して來ると、愈々強く活動することゝなつたのは、毫も怪しむに足りない。

されば申すも恐れ多き事ながら、かゝる意味に於いて、逆賊北條氏や足利氏を討伐遊ばされんとして、果し給ふこと能はず、怨を吞んで崩御しました後鳥羽天皇或は後醍醐天皇等の、最も御無念のこもらせられた御神靈は、強くも明治天皇を助けましたし、遂に明治維新の大業

七百年並に六百年祭を迎へ奉る

を遂行せしめ給ふた。しかも更に昭和の聖世に於いて、その七百年並びに六百年の御式年祭を迎へ奉るに及んでは、全國民一人として、その聖徳を仰がざるものなきに至らしめ給ふたのであつて、これ偏に御神徳の然らしめ給ふ所と、恐察せざるを得ないのである。

即ちこれを後鳥羽天皇の承久の昔に偲び奉り、或は後醍醐天皇以下歴世の吉野朝廷の哀史に顧るに、感慨轉た堪へ難きものがあるのであつて、今日の國民も當時の國民の血をついだものではあるが、その間に於いて、恰も國民が悉く別人となつたかの觀があるのは、御神徳の御發現によつたものと拜察されるのである。

かくの如き御神霊の御働きは、些々たる眼前の事のみ拘泥してゐては、決して感得出来るものではないが、眼を開いて大勢を達觀し、思を潜めて國史の大局に鑑みる所あらば、そこに御神徳の炳乎たるものがあらせられることは、自ら明白であらう。

歴世の御神霊と國威の發揚

而して畏れ多くもわが國威の發揚に、御辛苦遊ばされた御歴代天皇の

國史に炳乎たる御神徳

國威發揚は御神霊の加護

おそるべしの御意義を拜祭す

豊公と御神霊の加護

御神霊の力は、非常に強くあらせられることは、十分奉察することが出来るが、その御歴代の御神霊が、豊公の上に大きな御力を及ぼし給うたことは、上に謹記した如く、明治天皇が豊公を以て「上古列聖之御偉業を繼述し奉」つた偉人と觀ぜられ、或は「おそるべし」と詠嘆し給うたことに依つて、明瞭に窺ひ知ることが出来たのである。即ちこの意味に於いては、天皇がおそるべしと仰せられたのは豊公その人よりも、むしろ豊公をして大業をなさしめ給うた上古列聖の御神霊の力をこそ、おそるべしと仰せられたものとも拜察されるのである。

然らば豊公はいかにして、かくの如く御神霊の加護を得るに至つたのであるかといふに、これまた豊公に大いなる善因があつたからであると考えられるが、詳しくいへば、豊公に乗り移られた御神霊が、まづ豊公

に一つの仕事を成し遂げさせ給うと、更により偉大な御神靈が乗り移り給ひ、かくの如くして、豊公が一步進めば、またより偉大な御神靈が、より大なる仕事をなさしめ給うたものと考へられる。

されば豊公の生涯には、實に種々の奇瑞があつた。豊公の母が日輪を呑むと夢見て、天文五年申の元旦に太閤を生み、それから幼名を日吉丸と呼んだと傳へる如きも、人口に膾炙する奇瑞である。普通これは後世の附會とされるが、實はさうではなく、豊公が天正十八年冬朝鮮に遣はした文書には、明らかに「慈母日輪懐中に入ると夢見て、吾を生めり。時に相士有りて曰く、日光照す所照臨せざるなし、後年其の世を蓋ふの氣あらんこと疑を容るべからず」と述べて居り、其他外國に對する文書には、よくかゝる出自を説いてゐるのであつて、一面からいへば、これは豊公が神國日本に生れたことを誇る爲であつたと考へられるから、いはゞ豊公の神國日本の自覺を現すものとせねばならぬ。更にまた俗間に行はるゝ十八拳でも、大將に鐵砲は當らぬことになつてゐる様に、武運の強い大將がよくあつて、例へば上杉謙信が小田原攻めをした時、その城池の蓮の花を見ながら食事をしてゐたのを、數名の城兵が城壁の銃眼から三度まで一齊射撃したけれども、謙信には當らなかつたといふ如き話が傳へられてゐるが、豊

朝鮮への文書

豊公の神國日本の自覺

上杉謙信に鐵砲當らず

皇軍將兵の天祐

豊公は常勝の英雄

豊公戦術の定石

公にもこんなことは度々であつたらしい。小牧の戦に於いては豊公にもこの種の傳説がある。それは恰も今次の聖戦に於いて、わが忠勇無雙なる皇軍將士の上に屢々あらはれた様な全く不可思議な天祐であつた。しかし此等も或は偶然といふものもあるかも知れぬが、更に大局からいつて、豊公ほど武運の強い大將は、まづ殆んど史上にこれを見ることは出来ないのである。即ち豊公はその生涯に於いて、幾十幾百度の戦争をしてゐるが、しかも自分は一度も敗け戦をしたことはなかつた。勝負は時の運といふけれども、戦へば必ず勝つのが豊公の戦であつた。ま



木下藤吉郎像

豊公の青年時代 (繪本太閤記より)

た豊公は徒らに戦で人を殺さうとはせず、天皇の御爲にすべてを生かさうとし、従つて無用の合戦を好む猪武者の眞似は決してしなかつた。大軍を以て敵を威嚇し、一兵を損せずして勝戦の外に得るのが、秀吉流の極意であつた。或は敵の兵糧を横取りしてこれを苦しめ、川があれば水攻めをするものと思つてゐるのが、豊公の戦の定石であつた。

豊公は大軍神

この意味よりすれば、豊公は實に大英雄であり、古今に類なき大武將であり、大軍神であつたといはねばならぬ。

豊公の武運を得たる所以

豊公の戦は義戦
皇威擴大の奉公
戦

而して豊公が、かくの如き武運を如何にして得たかといへば、それは全く豊公の戦が常に山崎の戦の如く義戦であり、また天旨を畏み、大御心を安んじ奉る皇威擴大の聖戦であつたからである。つまり豊公は全く私心なき、奉公の戦をしたのであるから、恰も今日、聖戦に従ふ皇軍の將士の上にある如き、天祐を得ることが出来たのであると信ぜられる。

豊公とヒツトラ

聞く所によれば、今日歐洲の天地を震撼せしめつゝある獨逸のヒツトラは、その心中民族を憶ふの一念より外なく、全く一點の私心なき英雄であるといふが、豊公の勤皇の心事も亦、これと一致するものであつたのである。

小牧・長久手の戦に於ける一部の敗戦

かくいへば、人或は、豊公の小牧・長久手の戦に於ける敗戦や、朝鮮征伐の失敗を指摘するかも知れない。しかし乍ら小牧・長久手の戦に於ては、戦局の一部に於いて部將が敗戦したの

全局に勝つ

であつて、大局に於いては、織田信雄は單獨講和を敢てし、かの家康も孤立無援に陥り、やがて豊公と城下の盟をなす結果を導いたのであつた。即ち豊公は一部で敗けて、全局に於いて勝つたのである。更に朝鮮征伐に至つては、これまた天が豊公に壽をかさず、統率の中心を失つて諸軍が本國へ引上げたから、充分なる戦果をあげ得なかつたけれども、戦争そのものは、一部の海戦を除いて、常戦常勝であつたことは、世人のよく知る所である。

朝鮮征伐の常勝

朝鮮征伐の眞意

従来の僻説を排す

而してこの朝鮮役に對しては、徳川時代の學者は、殆んど悉く幕府を憚り、時勢に左右されて、豊公が徒らに無用の戦を開いたものの如く説き、明治以後の學者も深く考ふる所なく、それに追隨して來たために、今日なほこの説は一般に行はれてゐる様であるが、これは全く、わが開闢以來の歴史の展開を無視し、國策を知らざる議論といはねばならぬ。されば徳川時代にあつても、かの「中朝事實」を著して、日本の眞面目を發揮した山鹿素行は、豊公の朝鮮征伐について

國策の戦

山鹿素行の説

豊公の朝鮮征伐は驍武弄兵に非ず

朝鮮の人にいろはを用ひしめんとす

秀吉晩年に及んで朝鮮を征伐す。その勇膽古今を抜出せり。凡そ朝鮮は本朝の屬國藩屏たること、往古神功皇后三韓を征伐せられしよりこの方、代々その制舊記に明白なり。その後本朝の王威衰へ、武家いまだ四海平均の化に及ぶことなし。故に朝鮮久しく本朝へ貢獻すること絶えて、中比より唯隣交の好を修すると稱す。故に秀吉朝鮮征伐をなし給ふ。此時朝鮮征伐の諸將、志を一にして忠義を竭さんには、朝鮮は言に及ばず、大明國も一旦敗亡に至るべし。秀吉の薨逝に因て、其功不全といへども、本朝の武威を異域に赫かすこと、神功皇后以降、秀吉の治世に在り。然れば朝鮮征伐は驍武弄兵にあらざる也。(武家事記)

といひ、時流を超越した、卓拔なる見解を下してゐるのである。

また豊公の文化的雄圖として見るべきは、朝鮮征伐の際、或人が通譯を伴ひゆくべきことをすゝめた時、太閤は笑つて、自分がゆくのは朝鮮の人に、いろはを用ひしめんがためであるといつたといふ。即ち太閤の命を受けて朝鮮に赴き、今日いふ宣撫工作に従つてゐた安國寺惠瓊は、朝鮮の人に日本語を教へてゐたのである。更に支那大陸を平定して後は、

北京に天皇を迎へ奉らんとす
豊公の興亞建設の方策

大皇國建設の大志

海外發展の方策

時運到來せず

後陽成天皇を北京に迎へ奉り、近郊十ヶ國を皇室へ獻じ、秀次を關白として土地を興へ、更に支那各地を諸將に分封して、所謂興亞の建設を遂行せしめんとしたのであつた。

そして自らは寧波にあつて、更に南海方面に進出し、南進の海洋政策を實現して一大理想國家を建設せんとしたのである。かくて東亞を打つて一丸とする大皇國を建設し、わが朝威を八紘に輝かし、國民に貿易上の利益を得しめ、海外安住の機會を興へんとしたのである。

かくの如く豊公の朝鮮役は、實に皇威擴大の國策を遂行せんとして、大陸の一角にその一步を踏み出したものであつたが、その薨去によつて軍を撤回するの止むなきに至つたのは、なほ未だ時運が到來しなかつたものといはねばなるまい。

豊公理想の實現

從つて、明治以後我國の日清・日露の兩役に於ける大捷、日韓併合、滿洲の經營、支那への進出、南海への發展等、その淵源を尋ねれば、何れも豊公理想の實現とすべく、天皇の御稜威の下に於ける、皇軍將兵の奮戦の賜であることはいふまでもないことながら、かつて朝鮮役に於いて、實果をあげ得なかつた豊公の無念のこもつた偉靈が、この皇威を翼賛、加護し奉つたものと信ぜられるのである。

神靈としての豊公

而して豊公の「おそるべき」偉業は、國の内外に亘り、更に内治に於いても政治・經濟・社會・思想・藝術その他文化の各方面に於いて、實に偉大なものがあり、殆んど舊來の日本を改造して近世日本を生み出した觀があることは、史家の齊しく認むる所である。この意味に於いて豊公の時代即ち所謂桃山時代の文化は、世界史上に陸離たる光彩を放つものであるが、豊公がかくの如き偉業を成したのは、要するに上に謹記した明治天皇御製に拜するが如く、すべて

豊公の偉靈皇威を翼賛加護し奉る

史家の認むる豊公の偉業

世界史上に輝く桃山文化

豊公は盡忠報國の人

公人としての豊公

豊公とムツソリ

神としての豊公は公人である

「國につくす」にあつた。即ち豊公が盡忠報國の一點の私心なき人であつたことは、明治天皇のお認め遊ばされた所であつたのである。このことは、この際特に國民の注意せねばならぬところである。それはいままで全く忘れられ勝であつたために、特にこゝにこれを強調するのであるが、人は豊公といへば、常に一個の人間としての太閤のみ考へ、大業翼賛の大功績者としての太閤を忘れてゐたのである。國民に最も親しまれた太閤は一面、人間としての太閤であつたのであるが、此面に於ても勿論幾多の美點があり、殊に身は平民から起つて、天下の關白にまで昇つた出世頭であつたわけで、恰も今日の伊太利のムツソリーニの如く、實に懦夫をも立たしむるに足る偉人といはねばならぬ。

而してここにこれから述べようとする豊公は、現人神にまします天皇の認め給うた神としての豊公についてである。換言すれば國家公認の公人としての豊公について、同時にまた現人神なるわがすめらみことの齋き祀り給うた神靈としての、豊公について述べようとするのである。

公人と私人との混同

偉大なる國家の神としての豊公は、次に記す如く豊國大明神であるが、豊國大明神の御神格を仰ぐに當つても、一般にはまだ國家の神と人間秀吉とについて混同してゐる向が多いから、特にここに注意を喚起しておきたいと思ふのである。

護國の英靈を祀る所以

右のことはわが國古來の神祇について、深く研究した人には、最も明白なことであるが、例へば今日東京の靖國神社並に各地の護國神社に奉祀される護國の英靈に對しても、人間と神格との相違を認識し得ない人があるのである。

即ちその英靈が、在世した時は、基督教徒又は佛教徒であつたから、これを祀るにも基督教又は佛教を以てした方がよいのではないかといふ

人間と神格との相違

私人としての英靈

戦争は公事

意見の如きがそれである。

しかしこれは全く認識不足であつて、古來わが國では戦争は常に公事とされるのであるから、戦争と云ふ公事即ち國家の爲に私の生命を捧げた靈を、護國の英靈として公に祀られる時は、現人神にまします天皇が、その國家への功勞を嘉納し給ひ、その靈を公のものとして祀られるのである。ここに一臣民の靈は、國家の神として再生するのである。さればかかる神なるが故に、天皇も亦、靖國神社に行幸され御親謁あらせられるのである。一臣民としての榮譽は、斷じてこれに過ぐるものではなく、ここに皇軍將兵の活動は、常に奉公の一念に終始するに至るのであるが、しかも靖國神社に於ける英靈には、全く私人としての性質はないのである。さればその英靈が在世した時、基督教を信じたか、佛教を信じたか

英靈は國家の公神

英靈に私的性質なし

神社が國家の宗
祀といはるる意
義

といふ如きは、この場合全然問題にならないのである。
ここにわが國獨特の公の意味があり、神社は「國家の宗祀」といはる
のであつて、天皇はこの公を上御一人として御一身に體現まします現
人神であらせられるから、その勅命によつてのみ、初めて臣民は國家の
神として祀られるのである。その勅命なくしては、何人も國家の神とは
なり得ないのである。

神とその國家的
意義

わが國に於ける神祇は、かくの如く最も重大なる國家的意義を有する
ことは、既にあまりにも明瞭なことであるから、この公の意味に於いて、
豊公の神靈即ち豊國大明神を考察し奉りたいと思ふのである。

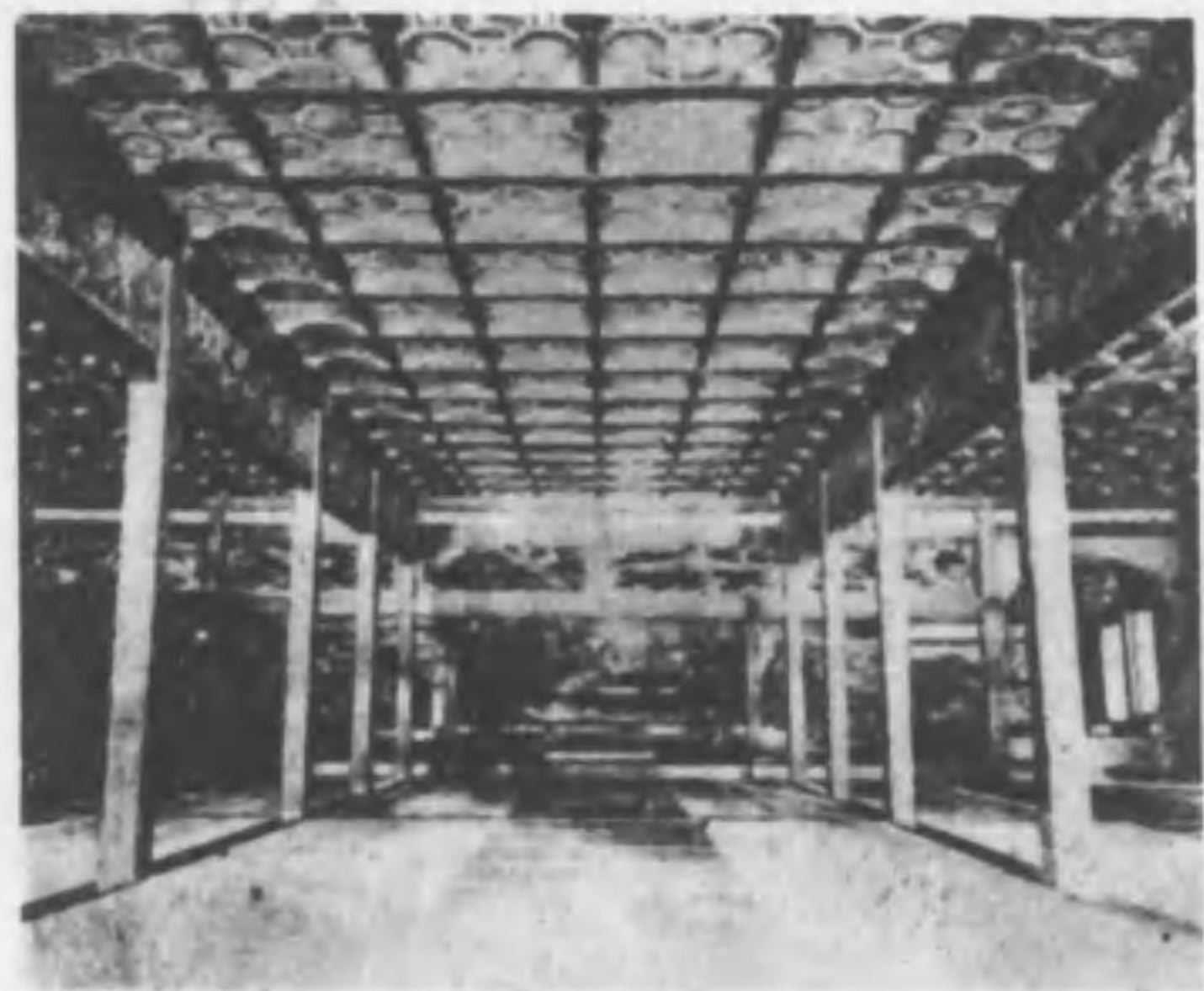
豊公の遺命と豊國廟

蓋世の大英雄であり、史代的最大政治家であり、且つ武門武士あつて

難波を思ひつ
つ去

豊公薨去の場所
は桃山御陵の地
に當る

以來の大勤王家であつた豊公は、今を去る三百四十一年の昔、愛兒秀頼
にやるせない思を遺し「難波のことも夢のまた夢」と最後の瞬間まで大



西本願寺書院
(伏見城本丸の遺構と傳ふ)

阪を憶ひつづけて、伏見城に薨去さ
れた。その場所はどの邊であるか、
いま明かにし難いが、恐らくそれは、
畏れ多いことながら、明治天皇の萬
代に鎮まり給ふ、只今の桃山御陵の
あたりではなかつたかと考へられる。
即ち伏見桃山の明治天皇陵の御場所
は、もと伏見城の本丸千疊敷の跡と
傳へるのであるから、豊公は正しく、此の地に於いて息を引取つたので

明治天皇親ら地を相し給ふ

明治天皇御愛讀の御書

天皇の興亞の聖業

豊公の偉靈天皇を迎へ奉れるか

ある。時に慶長三年八月十八日(太閤暦九月十八日)丑時(午前二時)であつた。

洩れ承るところに依れば、いま明治天皇の桃山御陵の地は、天皇御親ら地を相し給うて、崩後陵墓を築かせられ、萬世の聖域たらしめられたといふことである。しかもまた明治天皇が、平素御愛讀遊ばされた御書の一は、實に太閤記であらせられたといふ。(尾池義雄氏著「太閤」五一二頁参照)

上に謹記した様に、維新の業成るや早くも豊公を祀り給ひ、御親ら太閤の如く、列聖の御偉業を繼述遊ばされ、清國を懲らし、露國を退け、日韓併合を斷行し給うて、東亞永遠の平和の基を確立遊ばされた明治天皇が、太閤永眠の地に、永久に鎮まり給うこととならせられたのは、これをしも偶然の一致と稱し奉つてよいであらうか。蓋しこれまた豊公の偉靈が、天皇を導き奉り、ここに御迎へ申上げたものと拜祭せざるを得ないであらう。

豊公明治天皇の御英靈を護り奉る

豊公の遺命

御所に向つて埋めらる

阿彌陀ヶ峰

比叡山と並んで國家を鎮護す

ないであらう。

されば豊公の英魂も亦、天皇の御出現を待つて、始めて快よくその眠を覺し、天皇を助け奉り、天皇の御英靈ここに鎮座ましますや、また常にこゝに、天皇を護り奉れること、拜祭されるのである。

豊公の死後、かねての遺命により、その遺骸は京都阿彌陀ヶ峰の頂上に葬られた。しかもその遺骸を埋むるに當つては、正しく西北の御所に向つてこれを埋め、ありし日の豊公が、日夜大御心を安んじ奉らんとして活動した如く、永遠に御所を護り奉る人柱となつたのである。蓋し阿彌陀ヶ峰は、東山三十六峰中、南部に於ける最高の山であり、御所よりは東南に位する絶勝の地である。されば王城の東北に當る鬼門を鎮護せしめんが爲に建立された比叡山延暦寺と相並んで、豊公に最も優渥なる御

豊國廟

恩願を垂れ給うた後陽成天皇のおはします御所を、晝夜を分たず護り奉る、これが實に豊公の本懐であつたのである。
かくて、阿彌陀ヶ峰頂上には、豊公の墓が築かれ、やがてまたその山麓のいま太閤坦と稱せられる所に、豪壯華麗を極めた豊國廟が營まれたのであつた。

豊國大明神

神號を贈らる

翌慶長四年四月十七日、後陽成天皇は、右の豊國廟に對して、豊國大明神の神號を贈られた。その時大納言勸修寺時豊、中納言正親町季秀等は、天旨を奉戴して、後陽成天皇の豊國大明神に告げ給ふ宣命を、その廟に傳達したのであつた。いまその宣命を謹記すれば左の如くである。

後陽成天皇の宣命

(原宣命體)

兵威を海外に振
施す
豊國大明神の神號

永遠に天皇朝廷
を護り賜へ

宣命體解

天皇カ詔旨ヲマト故博陸大相國豊臣朝臣ニ詔ヘト勅命ヲ聞食ト宣ラス。
兵威ヲ異域ノ外ニ振ヒ、恩澤ヲ率土ノ間ニ施シ、行善敦而德顯ル。身
沒而名存セリ。ソノ靈ヲ崇テ城ノ東南ニ大宮柱廣敷立テ吉日良辰ヲ撰
定テ豊國ノ大明神ト上給ヒ治賜フ。此狀ヲ平ケク安ケク聞食テ、靈驗
新ニ天皇朝廷ヲ寶位無動ク常磐堅磐ニ夜守日守ニ護幸給ヒテ天下昇平
ニ海内靜謐ニ護恤賜ヘト、恐ミ恐ミモ申賜ハクト申ス
即ち「天皇が豊公の偉靈に告げ給うた大御心は、國威を海外に輝かせ、めぐみを世界に施し、
その行ひも情深く、徳も高かつた豊公は、死してなほその名を忘るる能はざる所である。よつ
てその靈を尊んで、京都の東南に壯大なる神殿を造り、よき日を選び定めて、豊國大明神とい
ふ神號を賜うのである。このことを平けく安けく承知して、愈々その靈驗をあらたかにして、
天皇朝廷即ち國家を護り、固く永久に萬世一系の皇統動きなき様に、夜も晝も暫らくも休みな
く守つて、世界が平和に榮え、國內も靜かに治まる様に、まもりめぐんで貰ひたいと、謹んで

後陽成天皇の恩命

願ふところである。」と仰せられるのである。



後陽成天皇
大光明神
勅額

かくの如く後陽成天皇は、公人としての豊公を、國威をあげ恩澤を國士に施した偉人と認め給ひ、その偉靈をして萬代に朝廷を護り國運の彌榮を守らしめんが爲

豊國山

に、阿彌陀ヶ峰に鎮め祀らしめられた事が知られるのである。かくて阿彌陀ヶ峰は豊國山と改められ、萬代不易の國家鎮護の靈場とさるるに至つたのである。

豊國廟城

當時その境域は、北は今の清水に接し、南は東福寺に及んで、三十萬坪と稱せられ、殊に寛

豊國大明神臨時祭屏風

豊公祭祀はわが神祇史上の一大先例



創建當時の豊國廟
(京都豊國神社藏・實國・豊國祭屏風より)

潤なる墓域には、蜿蜒數十丁に亘る土壘を築いて禁足地とし、更に豊國廟は宏壯華麗、殆んど前古に比類を見なかつたことは、現存する豊國大明神臨時祭之圖屏風(京都豊國神社藏・國寶)等に依つて、明らかに知ることが出来るのである。

しかもわが國開闢以來、身は臣下ながらその功業をもつて死後直ちに神靈として祀られ、國家鎮護の勅命を蒙つたのは、實に豊公を以てその最初とするのであつて、この意味に於いて、後陽成天皇の御英斷は、わが神祇史上に一大先例を開かせ給うたものであり、まことに畏き極みと申さねばならぬ。勿論當時前田玄以等豊公恩願の臣が、朝廷に願ひ奉つて、かくの如き破格の恩命を拜することを得たのではあ

身骨を埋めて國
家を守る

神としての豊國
の意義

國家公認の豊公
の精神

正遷宮祭

正一位を贈らる

豊國は豊葦原瑞
穗國の略稱

るが、阿彌陀ヶ峰に葬ることが既に豊公の遺命であつたとすれば、天皇も亦その生前の功業に顧み給ひ、更にまた死してなほ身骨を埋めて、萬代に國家を守護し奉らんとする豊公の心事を、嘉納しましたものと拜察されるのである。

かくの如く、豊公の國家を護り國威を輝かして朝恩に酬い奉る一念が、神靈としての豊國の意義であつたのであるから、豊公の一々の事業は、ここにこれを説かずとも、天皇の大詔により、豊國大明神として、天皇がこれを奉祀し給うた所以を明かにすることによつて、國家に公認された豊公の精神は、ここに自らその全貌を明らかにするわけである。

かくて慶長四年四月十七日豊公は勅命により、護國の神となり、翌十八日正遷宮日時の宣下があり、直ちに同日亥時（午後）正遷宮の儀が行はれ、尋で十九日、豊國大明神を正一位に叙せられたのであつた。

而して豊國の神號は、豊葦原瑞穗國とよばれる我國の古名を略稱された

豊國の國家的意
義

徳川時代初期の
豊公の偉靈

徳川光圀と豊公
顯彰

光圀の勤王精神
との合致

もので、兼ねて「天長地久萬民豊樂」の意によつて、朝廷から賜はつた豊臣の意をも寓せられたのでから、全く深い國家的意義のあることが察知せられるのである。

豊公の偉靈と明治維新

而して豊公の偉靈は、徳川時代初期に於いても我國民の上に強く働き給ひ、國民の海外雄飛を導き給うたが、やがて鎖國時代となつては、再生再來して更に大きな活動をなさんとする豫備工作として、暫らく隠忍自重し給うかの如くであつた。かくする内に豊公の靈力は、また意外の方面にあらはれ、やがて明治維新の大業にも、その威力を發揮し給ふこととなつたのである。

即ち豊公の勤皇精神は、早くも徳川光圀の勤皇精神を刺戟し、皮肉にも豊臣氏を滅した家康の孫をして豊公顯彰の第一聲を揚げしむるに至つた。光圀の勤皇精神は、大日本史の編纂となり、湊川に「噫呼忠臣楠子

豊公の國體明徴の事蹟

之墓」を建設せしむるに至つたことは、周知の事實であるが、光圀の豊公顯彰も、これらと全く同一精神から出たことである。換言すれば、幕府を開かず、一途に朝威をあげ、明使を叱咤して國體を明徴ならしめた豊公の事蹟は、大義名分を明かならしめんとした光圀の勤皇精神と、完全

水戸學派と征韓偉略

英雄の出現を待望

豊國廟再興の聲

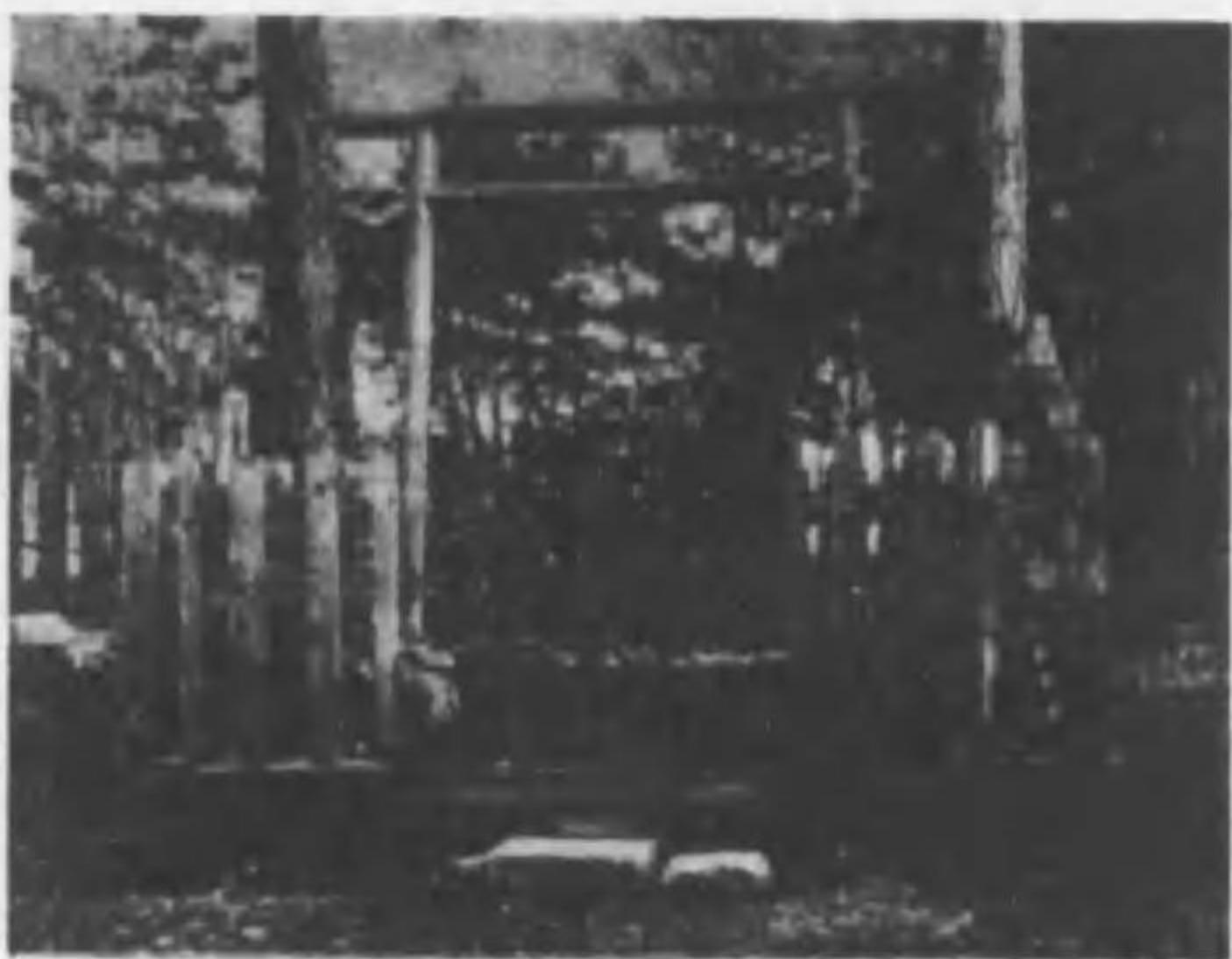
爾來光圀の志をついだ水戸學派は、豊公の遺徳を顯彰せんとするのが常であつたが、中にはいさゝか豊公を評議したものもないではない。しかし乍らまた彰考館編輯總裁川口長孺の如きは、豊公の朝鮮征伐を詳細に研究して、別に「征韓偉略」を著し、これを刊行してその事蹟を明らかならしめたのであつた。かくて徳川時代末期に及び、内外多事を極め、尊皇攘夷の論がやかましくなり、國威を海外に發揚すべき大英雄の出現を待望する國民的熱氣が、次第に濃厚となるに至るや、豊公偉靈の豫備工作は、一應完了し、俄然としてその威力を發揮せらるるに至つたのである。

されば徳川氏が大阪冬・夏の陣後、種々と難辭をつけて、元和五年無慘にも廢棄して了つた

再興の意義

皇政復古

明治維新の幕切つて落さる



墓の公豊るせ廢荒の年初治明

阿彌陀ヶ峰の豊公の墓並びに豊國廟を再建せんとする運動が、この王政復古の大機運に乗じて、大なる聲となつて現はれて來たことは、まことに必然の勢であつたといはねばならぬ。これ即ち尊皇攘夷の大業を遂行せんが爲には、勤皇のために粉骨碎身し、國威を海外に輝かして夷敵をして顔色なからしめた豊公の偉靈を祀り、その加護を得んとするものに外ならなかつたのである。

豊公祭祀の恩命

かくて慶應三年十月十四日徳川慶喜は、大政を朝廷に奉還し、越えて十二月九日を以て、復古の大號令が發せられた。ここに輝かしき明治維新の幕は切つて落されたのであるが、よつて明治天皇は、萬機一新の大改革を斷行し給はんとし、江戸御親

明治天皇の大坂
行幸

征の大旗を掲げ給ひ、翌明治元年三月二十一日京都御出發、鳳輦を大阪に進め給ひ、同二十三日初めて大阪に行幸された。これが維新史上に名高い大坂行幸であるが、この際に當り、天皇は豊公の大勳威烈を表彰し、萬世に不朽たらしむべく、閏四月六日を以て豊公に最もゆかりの深い大阪城下に、豊公を祀るべき神社造營を、御沙汰あらせらるることとなつたのである。これ實に上記の如き、豊公祭祀の大いなる聲を嘉納し給うたものと拜察される。而して當時の御沙汰書は實に左の如く拜せられる。

御沙汰書

御沙汰書

經國の大綱

有功ヲ顯シ有罪ヲ罰ス 經國之大綱 況ヤ國家ニ大勳勞有之候者 表シテ顯スコト無之節ハ 何ヲ以テ天下ヲ勸勵可被遊哉 豊臣太閤側微

上古列聖の御偉業を繼述し奉る

ニ起リ一臂ヲ攘テ天下之難ヲ定メ 上古列聖之御偉業ヲ繼述シ奉リ 皇威ヲ海外ニ宣ヘ 數百年之後猶彼ヲシテ寒心セシム 其國家ニ大勳

豊太閤の魂殆ど
餒んとす



寫書汰沙御るれば賜へ阪大 (藏社神國登阪大)

般 朝憲復故萬機一新ノ際如此ノ慶典舉サルヘカラス 加之宇内各國

勞アル古今ニ超越スル者ト可申 抑 武臣國家ニ功アル皆廟食其勞ニ酬ユ 當時朝廷既ニ神號ヲ追諡セラレ候處 不幸ニシテ天其家ニ祚セス 一朝傾覆シ源家康繼テ出テ 子孫相受ケ 其宗祀ノ宏壯前古無比 豊太閤ノ大勳ヲ以テ晦没ニ委シ其ノ鬼殆ト餓ン トスルニ及候段深歎思食候折柄 今

豊太閤の如き人を得させられたき御思召

相雄飛スルノ時ニ當リ 豊太閤其人ノ如キ英智雄略ノ人ヲ被爲得度
思食 依之新ニ祠宇ヲ造營シ 其大勳偉烈ヲ表顯シ 萬世不朽ニ被爲
垂度 仰出候 列侯及士庶豊太閤ノ恩義ヲ蒙リ候モノ不少 宜シク共
ニ合力シ舊徳ニ可報旨

御沙汰候事

御沙汰書謹解

いま其の御思召を謹述すれば「手柄のあるものをほめ、罪あるものを罰するのが、國家を治むる大綱である。まして國家に大きな手柄のあるものを、表彰せずして何を以て國民を善導することが出来ようか。豊太閤は身卑賤より起つて、一身の力を以て國家の難を平定し、上古列聖の御偉業をうけつぎ奉り、皇威を海外に輝かし、數百年の後もなほ、彼國をして我國を恐れしめてゐる。その國家に大きな手柄のあることは、前古に類のないものといはねばならぬ。大體武臣にして國家に手柄があれば、皆その歿後これに酬いるのが常であり、豊太閤も當時朝廷では、既に神號を追贈されたのであるが、不幸にも天がその家に幸せず、家が倒れ、徳川家康

御沙汰書附屬文

が繼いで出で、その子孫が相續したため、家康公の廟即ち日光廟は、その宏壯なること前古無比であつたにも拘はらず、豊太閤の大きな手柄は、これを埋もれさせて了つて、その神靈も殆んど飢えんとするに立至つたことを、深く歎き思召された折柄、今回朝政古に復り萬づの政治を一新される時が来たから、かくの如き廢典は興さなければならぬ。

其の上、世界各國が互に雄飛するの時代に當り、豊太閤その人の如き、英智雄略の人を得させられたく思召される。これに依つて新らしく神社を造營し、豊太閤の大きな手柄、勳皇の壮志を表はし、萬世に滅びざる様にせよと仰せ出だされる所である。諸大名及び武士庶民にして豊太閤の恩義を蒙つたものも少くないことであるから、宜し協力して、昔の恩に報いよ。」略々以上の如き優渥なる御思召であつたのである。そして右の御沙汰書と同時に、また左の如く仰出された。

別紙之通被 仰出候ニ付テハ大阪城外近傍ニ於テ相應之地ヲ撰ヒ社壇
造營被 仰出候 且天下有志之者御手傳致度儀申出候得ハ御差許ニ相
成候間於裁判所早々程能可取計様被 仰出候事

明治天皇の御思召

當時の日本は累卵の危きにあり

即ちこれに依つて、豊公を大阪に祀るべき明治天皇の御思召を明瞭に知り奉ることが出来るのである。

而して特に右の御沙汰書中に、上記の如く豊公を以て「上古列聖之御偉業ヲ繼述シ奉リ、皇威ヲ海外ニ宣ベ數百年之後猶彼ヲシテ寒心セシム其國家ニ大動勞アル古今ニ超越スル者ト可申」と仰せられ、更に「宇内各國相雄飛スルノ時ニ當リ豊太閤其ノ人ノ如キ英智雄略ノ人ヲ被爲得度思食」と宣うたのは、誠に恐れ多い極みであつて、當時の日本の實情を回顧すれば、世は皇政に復したとはいへ、内になほ幕府に心をよするものがあり、外に歐米列強の窺ふあつて、實に日本は累卵の危きにあつたのである。

明治元年は、西紀一八六八年に當り、西洋史上に於いては、自由統一主義流行時代と呼ばれ、

當時の歐米列強

歐米各國侵略の魔手を延ばさんとす

英國は産業革命を完成し、自由主義を以て世界經濟を制覇しつゝあつた。續いて今日の伊太利・獨逸も國家統一により、次第に世界史上の分割に参加したのであつた。まづ一八七一年（明治四年）の獨逸戰役により、獨逸はその統一を完成し、これより時代は、帝國主義世界政策流行時代に入り、歐米列強はその侵略の魔手を、亞細亞・太平洋諸島・亞弗利加等の地に及ぼすに至つたのであるから、右の御沙汰書に「宇内各國相雄飛するの時」と仰せられたのは、實に世界の大事を洞察し給うたものといはねばならぬ。

かかる東亞非常の際に、國內ではなほ同胞互に相せめぐ状態にあつたのであるから、皇道世界維新の御英志を抱かせられた天皇は、豊公の如き大人物の出現を待望ましますこと、實に切なるものがあらせられたに相違ない。

即ち天皇はその切なる御思召を右の御沙汰書に、如實に吐露せしめ給うたものと拜されるが、かくて天皇は、豊公の偉靈を祀らしめ、その靈力の發揮によつて、一層皇運を扶翼せしめ、萬機一新の非常時を克服し、

明治天皇の御待望

明治天皇豊公を祀らせ給ひし御意義

大阪に勅命を下し給へる御意義

國家を富嶽の安きに置きたいとの御念願であらせられたことは、掌を指すが如く明々白白たるものがあるのである。

しかも明治天皇が、これを大阪に命じ給うたのは、豊公が大阪を以て上記の如く國內を平定して大御心を安んじ奉り、更に世界發展の壮志を實現すべき根據地として、かつて大阪城を築いたところであるからに外ならぬ。

人心の一新
萬里の波濤を拓開せんとし給ふ

即ち天皇は大久保利通等の意見により、人心を新にすべく遷都を決意遊ばされ、江戸御親征の鳳輦を、大阪の地へ進めさせられたのであるが、前記五ヶ條御誓文の御宸翰にも宣うた如く、「萬里の波濤を拓開」せんがために、特にかつて萬里の波濤を拓開せんとした豊公の雄圖を思召され、ここに豊公祭祀の恩命を下し給うたものと拜察される。しかもそれ

上古列聖の御偉業を繼述し給はるんがために豊公を祀らせ給ふ

は、豊公が上に謹記せる如く「上古列聖の御偉業を繼述」した偉人であるからであり、天皇も亦上古列聖の御偉業を繼述し給はんがために、いたくも御宸襟を惱まし給うたからに外ならぬ。かくて我等は豊公を祀らんとし給ふ天皇の御思召が、奈邊にましましたかを、充分拜察することが出来るのである。

木戸孝允公の發議

當時この事はかつて豊公と密接な關係にあり、幕末に於いては尊王攘夷の大旗をかざして、終始一步も退かなかつた長州藩の志士木戸孝允公に發し、岩倉具視公によつて、上奏せられたと洩れ承るにつけても、その因縁の奇しきを思はざるを得ないものがある。

京都へ還幸

然るにその間、江戸城は無血開城を見、事態は一應収まつたから、天皇は大阪御駐紮前後四十餘日にして、明治元年閏四月七日大阪を發し給ひ、一先づ京都へ還幸あらせられたのである。

大阪への第一の勅命

されば右の御沙汰は、天皇が維新の最初に當り、特に大阪に賜うた第一の勅命であり、明治以後、世界の大阪として發展すべき大大阪の使命

大阪人の感激

を、豊公の偉霊をして、加護せしめ給うたものともいふ事が出来るであらう。當時大阪の住民が、いかばかり感激奉戴したかを、察することが出来る。

豊國廟再興の恩命

豊國廟再興の御沙汰書

右の豊公祭祀の恩命を下し給うてから、一ヶ月餘を経て同年五月十日、今度は京都阿彌陀ヶ峰即ち豊國山の豊國廟祀の御再興を仰出され、左の如き優渥なる御沙汰書を賜うた。

太閤は撥亂反正翼戴糾合其功績六合に互る萬世人臣の模範

先般浪花ヨリ 大駕御凱旋ノ節豊太閤ノ社御建立被 仰出候 抑太閤ハ撥亂反正翼戴糾合其功績六合ニ互リ 加之皇威ヲ海外ニ赫輝シ寶運ヲ振起シ萬世人臣ノ模範ト相成候段深く御稱譽被 遊 先年致敗毀候豊國山ノ廟 更ニ御再興被 仰出候 依テハ當時其恩願ヲ受候後裔ハ

天下衆庶を手傳はしめらる

勿論其英風ヲ仰慕ノ輩御手傳願出候者ハ御差許ニ相成候間天下ノ衆庶能此旨ヲ得候様

御沙汰候事

拜讀して直ちに知らるる如く、先に大阪に下し給ふた御思召と全く同様の御趣旨であり、しかもこの方には、萬世人臣の模範とまで豊公を激賞あらせられたのである。

官祭の御執行

而して同年八月十八日、恰も豊公の二百七十年の薨去の日に於いては、特別を以て神祇官より大掌典を豊國山麓墓前に參向せしめられ、官祭を行はせられたのであるが、その時の御祭文こそ實に豊公の遺徳を剩すところなく述べさせ給うたものと拜されるのである。即ち左の如くであらせられる。(原宣命體)

御祭文

豊國の神の稜威
墓所修造

大御世を守り賜
大勳功を立て大
事業を起さしめ
賜へ

御祭文謹解

豊國ノ神ノ稜威ハ諸藩ノ夷等マテ恐惶マリ其偉業ノ古今ニ類ヒ無キ事
ヲシ深ク感ケ給ヒ愛給ヒテ先ニ浪華ノ城ノ下ニ社造營リ齋ヒ祭レト依
シ賜ヒ此ノ墓所ヲモ修造ト大詔命セ賜ヒ又今日ノ八月十八日ノ祭日ニ
種々ノ神饌設備テ如斯ク祭ラシメ賜フ事ヲ平ラケク安ラケク受サセ賜
ヒテ大御世ヲ手長ノ御世ニ守リ賜ヒ幸ヘ賜ヒ諸臣等ニ靈幸ヒ坐テ大勳
功ヲ立シメ賜ヒ大勳功ヲ起サシメ賜ヘト掛卷モ綾ニ畏キ天皇命ノ乞願
思食ス大御意ヲ聞食ト告ス

明治元辰八月十八日

謹解すれば「豊國の神の御力は、外夷諸國まで恐れてゐる。其の偉業が古今に類ひないこと
を深く感賞し給うて、先に大阪の城の下に社殿を造營して、祀り奉れと命令された。いま此の
墓所をも修造せよと命じ給ふ。また今日八月十八日の薨去の日に、種々の神饌を供へて、この
様に祭らせられることを、平らけく安らけく受けて、大御世を永久に守り給ひ、幸福あらせ給

明治天皇の大御
心による豊公偉
靈の再生

豊公は國家の公
神

別格官幣社京都
豊國神社の略治
革

へ。また國民に靈驗を與へて、立派な手柄をたてさせ、大勳功を起させ給へと、畏れ多いこと
ではあるが、天皇が請ひ願はれるところである。この大御心を叶へて戴き度い。」と仰せられ
るのであつて、全く先に大阪へ下し給ふた恩命と同一御趣旨である。
これはまた上に謹記した後陽成天皇の宣命の御趣旨とも合致したもので
あるから、護國の神としての豊公の神靈は、こゝに明治天皇の大御心によ
り、新らしき意義を以て、明らかに再生・再來したものといふことが出
來るであらう。
されば我々は、豊公の神靈を拜するに當つては、明治天皇の仰せられ
た御趣旨に依り、國家の公神として崇敬せねばならぬことはいふまでも
無い。

京都豊國神社

かくて明治元年十月、かねて徳川幕府より委任されたる京都妙法院よ

豊公墓の季管

方廣寺大佛殿址に再建

り、豊公の墓を政府の神祇官に引継ぎ、やがて同二年八月十八日にも亦官祭を行はせられたが、同六年八月十八日、同社を別格官幣社に列せられ、又官祭を行はせらるる所があつた。以上の祭典は、當時なほ豊國神社の再建が出来てゐなかつた爲、山下の新日吉神社御饌殿を以て、臨時に之に充てられたのである。

京都に於ける豊國神社の再興は、その後種々迂曲折があり、遂にもとの豊國廟址即ち太閤壇には再建されず、方廣寺大佛殿址に建設され、明治十三年九月十五日正遷宮祭が執行されたのである。

明治天皇の御思召

豊國廟域を附屬地とす

かくて大阪に豊公を祀れと宣うた明治天皇の聖旨は、京都に變更されたわけであるが、これまた天皇の深い御思召によるのであつて、當時京都は、東京御遷都の爲にいたく寂れ、漸く衰頹を來さんとしたので、これを復興する御思召であつたと洩れ承る。

越えて翌十四年七月一日、阿彌陀ヶ峰豊國廟域は、豊國神社附屬地たるべき旨、京都府より達があり、その後豊國會が設立せられ、山上の豊

豊國會と豊公墓の改修

墓域

公の墓の改修に努力し、明治三十一年三月三十日竣工を見た。

その墓域約三萬四千坪、昔の三十萬坪に比すれば、十分の一に過ぎないが、なほ壯大といはねばならぬ。



現在阿彌陀ヶ峰上
豊國廟 即ち豊公の墓

山上の豊公の墓には、高さ約三十二尺の大五輪塔が建設せられ、五百六十五段の石段を附設し、荒廢してゐた豊公の墓も漸く面目を一新するに至つた。

廟址太閤壇

豊公墓の五輪塔

これが別格官幣社豊國神社並に今の豊國廟の略沿革であるが、その昔豪壯無比と稱せられた豊國廟は、今はその跡方もなく、太閤壇と稱せらるる廟址には、徒らに草蒸し、そとろに遊子の心を悲しませてゐる。

豊國神社の境域
と國家安康の鐘

しかも豊國神社は、いま京都大佛方廣寺に隣して、かの慶長十九年大
阪冬の陣を勃發せしめた、所謂大佛の鐘の側に鎮座ましますわけである。
大佛の鐘は即ち國家安康の銘のある鐘であり、徳川家康は、この銘に難
癖をつけて、豊公一家を滅したのであるから、いはばこの鐘は、豊公一
家滅亡の悲運を奏てる哀鐘といはねばならぬが、いまは心なき遊客の撞
くにまかせてあるから、豊公は朝夕いとも間近く、この哀音を聞き給ふ
有様であつて、豊公の神靈も、ために安らかに鎮まり給ふこと能はぬ感
がせられるのは、まことに恐れ多い次第といはねばならぬ。

大阪豊國神社

而して明治天皇が浪華の城の下に、豊公の神社を造營せよとの上に謹

大阪府社豊國神
社の略沿革

豊公安らかに鎮
まり給ふ能はず

初め京都の別社
として創建

初めの境域

天守に向ひ東面
して建てらる

神域猥雜を加ふ

記せる恩命は、京都に變更さるるに至つたが、それと共に明治八年四月
七日、大阪府へも京都豊國神社の別社として、一社の創立を仰出され、
同九年七月三日、社地を中之島一丁目字山崎の鼻に選定し、同十二年十
一月二十八日を以て、正遷宮を行つたのである。

これは實に今の中之島公園中央公會堂の在る邊で、初めは明治天皇の
御思召を奉戴して、大阪城の天守閣に向つて、東面して建設せられ、神
域こそ千坪足らずの狭いところであつたが、周圍が寛濶であり、清淨で
あつたため、社殿も奥床しく拜され、豊公を偲ぶにふさはしい莊嚴な社
宇であつた。

しかし年移り星變る間に、中之島には、種々の建築が立ち、次第に猥雜を加へて來たのと、
次に記す如く、某氏の一寄附に係る大阪市中央公會堂の建設等の爲、神社は移建の止むなきに

神威甚だ振はせ給はざる觀あり

移建

獨立

現在の社殿

南面に變へらる

至り、しかも現在の如く周囲の大建築に壓倒せられて、豊國神社は、神威甚だ振はざるかの觀を呈するに至つたことは、誠に恐懼に堪へない。

即ちその後大阪豊國神社別社は、明治四十五年七月二十九日、許可を得て、當時大阪市中

之島公園の一部であつた大阪府立圖書館西方の地に移轉の工を起し、同年（大正元年）十一月十五日正遷宮祭を執行した。

これが現在の社域であるが、尋いで大正十年十二月京都豊國神社別社の儀を廢止せられ、別社として創設されてから、四十三年にして漸く獨立し、ここに改めて豊國神社と稱し、府社に列せられることとなつたのである。

現在の社殿はその後更に改築せられ、昭和九年十月二十六日、遷座祭を執行されたものである。現社地は一千四百九十三坪餘であるが、舊社地は上記の如く、



大阪豊國神社の現狀

中央公會堂の敷地となり、社殿も昔は東面して大阪城天守閣に向つてゐたが、現在では南面に

變つて了つたのである。

豊公の神罰

前に述べた如く、今は亡き某氏が、百萬圓の大寄附をして、現在の大阪中央公會堂が建設された時、豊國神社は現在の地へ移建されたのであるが、當時の百萬圓は現在の千萬圓乃至はそれ以上にも該當すべく、某氏の大阪市民に與へた利便は、大いに徳とすべきものであつた。しかし心なき當局者は、當時豊國神社の移建に當り、社殿の向も南面に變へ、現在の如き狹隘なる地域に奉祀するに至つた。

爾來市公會堂の偉容は、大阪市民の誇となり、某氏の靈も亦、大阪市民の上に生きて活動しつあるかの如く考へられるが、しかも豊國神社を移建し、神域をけがせる爲ともいふべきか、一時飛ぶ鳥をも落す勢で

大阪市中央公會堂の建設

某氏の百萬圓の寄附

大阪市中央公會堂の偉容

某氏の自殺

あつた某氏は、その後事業に蹉跌を來し、破綻を重ねた結果、遂に有爲の材を抱き乍ら、拳銃を以て自殺し、公會堂の竣工も見ないで逝去し、あはれ權花一朝の嘆きを見たことは、世人の未だに忘るる能はざる所であらう。

神罰觀面

高野山の豊公一族の墓

思ふてここに至れば、吾人は悚然として戦かざるを得ないものがあるのであつて、豊公薨じてここに三百四十一年、その神威愈あらたかなるものがあるといふを得べく、實に神罰觀面の感があるのである。
なほ外にもこの種の例をあげると、高野山奥の院に建てられた豊公一族の墓も、明治四十三年、當時貿易商として全盛を極めた某商會主某氏が、寺僧に謀つて兆域を定め、垣を設け、石段を築いて參拜に便したのであつた。和歌山縣より史蹟に指定せられて、今日に残つてゐる豊公一族

某氏豊公墓域を整理し自らの墓を築く

某商會の没落



某の族一公豊山野高
(墓の氏某が墓き高段一の外柵)

の墓がそれである。しかしこの時定められた兆域は、俗に能屋敷と稱せられた舊豊臣家墓地の全部であつたか否かは、甚だ疑問であり、その兆域に隣接して、當時某氏が相當大きな自己夫妻の墓を建設したのであるが、或はその場所も昔の豊臣家一族の墓域の一部ではなかつたかと考へられるのである、某氏の墓は今日も存するが、某氏がかかる善根を蒔いたに拘らず、その後間もなく某商會は没落し、今日その片影すら留めない様になつて了つた。これ亦豊公の神慮に觸れたものと、いはざるを得ない心地がするのである。

史蹟豊公一族の墓の現状

高野山復興の大恩人豊公の墓高野山になし

獻燈なく荒れ果たり

豊公一族の墓の復舊

因みに、高野山に於ける豊公一族の墓とは、天正十五年豊太閤が母の大政所の逆修の爲、建立した五輪塔を初めとして、合計十基の石塔の立並ぶ一劃をいふのである。

所てその中大政所の逆修墓等六基は、明らかに豊公一族の墓であるが、豊公自身の墓があるかないかに就て、調査した結果、遺つてゐないことが分つた。即ち高野山復興の大恩人たる豊公の墓も、高野山には遺されてゐないわけであり、且つこの豊公一族の墓には、獻燈もなく、荒れ果てて、全く忘れ去られた観があるのは、これも豊公の爲に残念な次第である。

されば高野山にあつては、豊公の墓を再興し、豊公一族の墓を復舊して、兆域を改め、祀壇を設け、豊公の墓にふさはしき設備をととのへ、祀りを絶えざらしむる様にし、以て永く豊公並に一族の冥福を祈り度いものである。

神怪なる因縁を説くものに非ず

豊公の神靈を祀り熱誠を捧げよ

いかに豊公を祀るべきか



大政所逆修墓 (高野山僧供養の處)

而して吾人は勿論好んでかかる神怪なる因縁を説くものではないけれども、豊公一族の墓の荒廢せるを見、且つこれにからまる不思議な噂を耳にし、或は公會堂を建設した某氏の例等を見る時、吾人は豊公の神靈を一層鄭重に祀つて、殊にこの非常時に於いて、益々その神威を發揮されんことを、熱誠こめて祈願せねばならぬと思ふものである。

然らばいかに豊公を祀るべきか、問題はここに轉じて、實行の方法が要求されてくるのである。

海外に奉祀せよ

豊公を海外の神社に奉祀せよ

まづ一般的に豊公を祀るべき方法に就いて、私見を述べれば、豊公の偉靈は、どうしても海外の神社に於いて、眞先に祭祀せられねばならぬと信ずる。即ち豊公は、上に謹記せる如く、明治天皇の聖旨に依り、上古列聖の御偉業を繼述し奉り、國威を海外に宣べんとした大英雄であることを公認せられたのであるが、その偉業は果されず、中途に倒れたのであるから、豊公の神靈を海外の神社に奉祀することは、豊公の遺志を遂げしむる所以であり、その無念のこもつた神靈は、必ずやその神力を倍加して、興亞の聖業を翼賛し奉るであらう。

興亞の聖業を遂行する所以

豊公の無念を遂げしめよ

換言すれば、興亞の聖業を遂行せんがためには、満洲・支那・南海地方はいふに及ばず、苟もわが皇軍の征くところ、宣撫工作の行はるるとこ

海外にある日本人の精神的依據たらしめよ

豊公は長期建設の人

豊公を手本とせよ

ろ、或はわが皇國の民の活躍するところ、神社を建つれば、必ず豊公を祀り、その神靈を鎮座して、日本人の精神的依據たらしめたい。これは豊公の満足せらるるところであり、また異境に身を置く日本人にとつて、どれ程深い精神的慰めてあり、強みとなることであらう。

勿論豊公は、決して武力のみの偉人ではなかつた。今日長期建設といはるる如き文化工作には、最も秀れた手腕を發揮した世界的政治家である。このことは前に記した豊公の國內平定の態度、朝鮮征伐の發端等を顧れば、明白な事實であり、後にもいささかこれに觸れたいと考へる。されば海外に活動する日本人は、その仕事の如何に拘らず、豊公を手本とし、豊公の遺志を奉體して行へば、必ず成功し、また皇國の爲になるのである。これまた先に謹掲した明治天皇の豊公に對する御稱譽の御言

明治天皇の御遺志に副ふ所以

神社局への提唱

海外にある日本人はその分靈を奉祀せよ

かくて外人との摩擦を克服すべし

葉に拜すれば、自ら明らかであり、更に明治天皇の御遺志にも副ふ所以であると思はれる。仄聞するところによれば、内務省神社局に於いては、海外の神社に奉祀すべき御神靈に就いて、苦心研究を重ねられつつあるといふが、この際に當つては、躊躇するところなく、豊公を奉祀されんことを神社局並に關係當局の方々に提唱するものである。そしてまた、海外にある日本人は、豊公を祀る神社に参拜すると共に、各官公署に、各戸に、各室に、豊公の分靈を奉祀し、朝夕その遺志を奉體されんことを希望するのである。これによつて初めて海外にある日本人が、奉公の念を涵養し、外人との摩擦を克服して、よく豊公の如く國威を揚げ得ると信ずる。

京都豊國神社の移建

豊公は、勤皇の赤誠を以て一貫した人であるが、上記の如く豊公は、

豊公は京都の人柱

荒都の復興

豊公の勤皇事業の一端

京都の面目を一新す

京都の御所に向つて身骨を埋め、とこしへに皇國を護る人柱となつたのである。しかも生前豊公が最も力をこめて復興した都市は、京都であつた。應仁の亂後一百有餘年、「都は野邊の夕雲雀」と、都人に涙を流さしめた荒れはてた都を、天旨をかしこみ、天皇の帝都にふさはしく復興し奉つた豊公の偉業は、國史に炳焉たる事蹟で、京都人の一日も忘るる能はざるところである。

而して豊公の京都復興は、悉く勤皇の赤誠より出たことであつた。まづ信長の遺志をついて御所を修造した豊公は、更に仙洞を造營し奉り、御土園を築き、市街を整然と區劃して、寺町・西寺町・寺の内等を設けた。そればかりでなく聚樂第を設けたのも、方廣寺大佛を建造したのも、伏見城を築いたのも、悉く永久に京都を皇都として榮えしめんが爲であり、

3 京都の繁榮を計

一時的繁榮策

現豊國神社の社地は不適當

慶長へ復古して壯大なる桃山式社殿を造營せよ

その他朝廷を護り奉る大社・大寺等の復興・造營は枚擧に遑がないが、これ皆天皇の御都京都の繁榮を計らんが爲であつた。それから一時的にも亦、北野の大茶湯を興行したり、金銀を公卿・諸大名に領賜したりして、京都の股賑を助け、或は慶長三年の醍醐の花見でさへも、翌年後陽成天皇を迎へ奉らんがために、施設大いに努めたのである。これ等の詳細についても別に稿を起す用意があるから、今は省略するが、前記明治天皇の豊公廟祀再興の恩命をかしこみ建造された現在の別格官幣社豊國神社は、その社地は甚だ不適當である。よろしく慶長の古に復して、既に計畫中なる、もとの豊國廟の址即ちいま太閤坦と稱せられる所へ、移建せねばならぬ。そして壯大なる桃山式の神殿を造營し、諸殿を附加して以て豊公の偉靈を慰め、愈その御神徳を發揮し給ふ様、熱誠なる祈願

報效精神の發揚

明治天皇の聖旨を奉戴する所以



豊國廟址太閤坦の原狀

現せしめたい。

をこめるのが、最も豊公の遺志に副ふ所以である。これがまた豊公に依つて復興された京都に住む人々の、豊公への報恩であり、そのまま豊公の如く、朝廷に對し奉り、報效の赤誠をいたす所以である。

即ちここに京都豊國神社の移轉、再築を提唱する所以であるが、これは又同時に、明治天皇が前に謹記せる如く、豊國廟を再興せよと仰せられた御趣旨を奉戴する所以であるから、官民有志の御協力を得て、是非共近き將來に實

豊公遺蹟の顯彰

それと共に全国各地、殊に近畿に於ける豊公並にその一族の遺蹟も、晦没のままに葬られてゐるものが多いから、これらを明らかにし、顯彰する方法も、考慮せられねばならぬことはいふまでもない。

皇都東京に豊國神社を建設せよ

豊公が京都を復興した所以は、皇都なるが故であつたことは、上記の如くである。而して豊公の本懐とするところは、天皇の大御身を護り奉るにあつたのであり、後陽成天皇も亦、豊公の勤皇の赤誠を嘉納されましたことは、上に謹掲せる宣命に、「天皇朝廷ヲ實位無動ク常磐堅磐ニ夜守日守幸給ヒテ」と宣うたことに依つて明かであるから皇都が東京に設定せられた明治以降に於いては、豊公の偉靈も亦、東京にまします天皇の大御身を護り奉り、東京を守護し給ふことと察せられる。明治天皇

豊公の京都を復興したる所以

豊公は皇都を護る

日も夜も天皇を
守り奉る

近世都市江戸の
開發は豊公の着
眼

豊公家康公を説く

家康公江戸築城
について豊公の
教を請ふ

が常に豊公を忘れ給はざりし叡慮の程も、或は豊公が日も夜も、天皇を御護り申上げたからであるとも拜察されるのである。

しかも東京の前身たる近世都市としての江戸の開發を、史上に願ると、實はまさしく豊公の着眼に依ることが知られるのである。

即ちその詳細は、尾池義雄氏が、その著「太閤」(三一八—三二二頁)の研究に明らかであるが、いま要約してこれを記せば、天正十八年豊公の小田原城攻圍中、豊公は徳川家康公に關八洲を與ふべきことを約し、江戸に居城を決すべきことを説いた。依つて家康公は同年六月、窺に人を江戸に下して地を検し、又江戸の百姓を招いて、その地の狀況を聞き、七月に至つて小田原が開城し、豊公が奥州に進發するや、家康公も亦、江戸に赴き、豊公をここに迎へて築城の教を請ひ、後、かの江戸城を築

従來の僻説

いて、徳川三百年の基を開いたのである。

しかしこれに就いては、當時から、豊公が徳川氏を忌んで、百姓心服の舊領三河等を奪ひ、關八州を與へて遠方に封じ、徳川氏の根基を覆さんとしたものと怨み、或は關八州を経営するには、小田原・鎌倉があるのに、茫々たる武藏の原の荒土に居らしめ、徳川氏を滅さんとしたものと邪推するものもあつた。後世の史家も亦、多くこの説をとつてゐるのであるが、尾池氏は研究の結果、これをいはれなき中傷なりとし、豊公の眞意を述べて次の如くいつてゐる。

當時の江戸

當時（中略）人口は増加して舊時の關東ではない。鎌倉は頼朝の時よかつたのであつて、家康の時によくはなく小田原は早雲の時によくて、家康の時は可ではない。新に關東を管するものは、必ず新に適地を求め

江戸を勤めし所以

江戸城回顧

江戸は景勝の地

豊公の眞意

當時の眞相

ねばならぬ。秀吉が江戸を勤めたのはこの故である。且つ又江戸は荒廢の地ではない。長祿元年太田道眞が城をここに築き、その子道灌が上杉氏に誅せられてからは、上杉氏の手落ち、後に又北條氏が上杉氏を攻め落すに及んで、北條氏に收められ、天正十八年四月まで北條氏が守つてゐたのである。固より今日の千百分の一でなかつたとはいへ、兎に角景勝の地として人のゐたところである。ここを以て見るときは、秀吉の意表は、この景勝の地を開けば、廣大な都市を建てるに足り、廣大な都市を建つれば八州を管し得るのみならず、關東北の全部を鎮め得べく、そしてその業に堪へるものは家康である、といふところに在つたであらう。

これこそ當時の眞相を道破せるものといふべく、以て豊公の適處に人材

人材抜擢の高邁なる識見

を抜擢した高邁なる識見を見得るが、又かの家康公の舊領を、股肱に與へたといふのも、實は、當時なほ去就の明確でなかつた織田信雄を封ぜんとして、信雄が受けなかつたからにすぎない。

家康公の江戸移封

かくて家康公は、天正十八年七月、小田原開城後僅か四十餘日を以て舊地を返附し、關八州を領して、神速に江戸に轉封したのであつた。果して江戸築城以來、徳川氏は關東北を鎮めたばかりでなく、遂に天下を取つて、江戸城は三百年統治の子孫の居城となり、江戸は又東京となつて、世界屈指の大都市となつた。實に尾池氏もいふ如く「けだしこれも亦秀吉の賜である。英雄の着眼施設には滅多に徒爾はない」のである。

豊公の題

豊公の先見の明

されば明治二年、明治天皇が東京に遷幸遊ばされ、萬機一新の皇都として大東京が設定された時、豊公は嘸かし地下に於いて、窺かにその先

豊公の偉靈明治天皇を東京に導き奉れるか

神のなし給ふことは神のみ知り給ふ

見の明を誇つたことでもあらう。いなむしろ、上記伏見城本丸址に、後年明治天皇が御親から地を相し給ふて、大御身を葬らしめ給ふた御事蹟と思ひ合すと、或はこれも亦、豊公の偉靈が、天皇を東京に導き奉つたものとも、拜察することが出来るであらう。神のなし給ふことは、神のみこれを知り給ふのであつて、凡人の窺知を許されないからである。

思ふてここに至れば、豊公の偉靈は、必ずやまた今日東京にあることは疑ひないところであるから、東京にも亦豊公を祀つて、豊公の歴代天皇を護り奉らんとする遺志を遂行させねばならぬ。これ東京に豊國神社建設を提唱する所以である。豊公恩顧の諸侯の子孫にして、今日東京に住居さるゝ人々も尠くないことであるから、是非とも實現に努力せられんことを切望する次第である。

東京豊國神社建設の提唱

大阪豊國神社と天守閣の回顧

明治天皇の聖旨に副ひ奉れ

石山本願寺

寺内町

石山合戦

而して大阪豊國神社も、上記の如く、明治天皇の特別なる御思召があらせられたのであるから、それに副ひ奉る様に、更に現社地を移轉して最も莊嚴なる社殿を造營し奉らねばならぬと信ずる。依つて再び明治天皇の前謹掲「浪華ノ城ノ下ニ」即ち「大阪城下近傍に於いて相應の地を選び社壇造營仰出され」た叡慮を畏み、當社と大阪城との關係を顧みたいと思ふ。

人も知る如く、大阪城の地は、もと石山と稱し、明應五年本願寺の中興たる蓮如上人が坊舎を建て、その後本願寺がここへ移り、石山本願寺として榮え、寺内町を設けて商都大阪の基を築いたのであるが、やがて天下統一の功業を成さんとした織田信長は、本願寺に寺地を懇望し、本願寺の顯如上人がこれを拒絶したところから、元龜元年より天正八年まで、前後十一年に亘る石山合戦の展開を見た。信長は遂に正親町天皇の勅旨を仰いで和を講じ、本願寺もまた朝家

信長公の薨去

豊公の大阪築城

フロイスの報告

の奉爲にここを譲り、やがて池田信輝がここに封ぜられたが、信長は他日ここに、皇都守護のために築城せんことを期したのであつた。

天正十年六月二日、信長公が本能寺に薨れ、豊公がその業を繼いで、天下統一の業に躍進するや、明敏なる豊公は、この要害の地を獲んとし、



大阪城遺蹟(黒田侯爵蔵) 大阪陣圖屏風(より)

信輝を美濃大垣に移し、自ら天正十一年五月(今年三百五十六年前)三十餘國の諸大名に命じ、大淀の流を利用して、ここに大阪城を築

き、金碧燦爛たる五重の大大守閣を築かせたのであつた。

當時來朝中の耶蘇教會師フロイスの報告によれば、豊公はこの爲に日

皇都の守護

夜三萬の人力を使役し、工事の進むにつれて、これを二倍し、三年以上を費したとあるが、かくて難攻不落を誇る名城の出現を見たのである。今日残存せる部分は、その本丸に過ぎないが、造築當時から海内無比と稱せられた所以は、これを知ることが出来る。

しかも豊公が、この城を築いたのは、明治天皇が仰せられた如く、國につくさんが爲であつて、ここを以て國內統一の根據地とし、皇都の守護たらしめんとしたばかりでなく、上記の如く世界發展の發足地たらしめんとしたのである。

これは大阪城は、當時既に豊公が鬱勃として、その胸に抱いてゐた世界發展の英志を、自ら形にあらはしたものと、いふことが出来るのである。

世界發展の發足地

北向八幡の勸請

眞書太閤記によれば、豊公は當時この名城の萬代太平の鎮守たらしめんがために、生國魂神社に八幡宮を北向に勸請奉祀したといふ。以て豊公がこの名城に留めた意氣込を知ることが出来る。

天守閣と運命

天守閣築造の目的

而して古來の歴史を顧るに、天守閣は普通にいはるる如く、軍事上からいへば、展望臺並に司令塔であると共に、軍事倉庫の役目を持ち、更にその城の運命が危くなつた時には、城兵が最後の據點としての戦を試みる場所ともなるのであるが、又平時に於いては城主の威嚴を示す築造物でもあつた。

特に豊公の時代には、なほ天守閣を以て城主の住居とする風も行はれたのであつて、この意味に於いて、天守閣は又一城の中心であると共に、

天守閣は城主の運命を象徴す

城主の運命そのものを象徴するものでもあつた。されば城主は、この防備嚴重な天守閣に逃げ込むことが出来れば、城主其他の將士は心靜かに自害する暇が得られたのである。

豊公もかつてこの意味のことを述べられたことがある。即ち天正十一年四月二十四日、豊公の大軍が越前北庄城に柴田勝家を圍んだ時、勝家はその天守閣に登つて悠々と最後の吟をなした。夫人並に諸士等と割腹したのであるが、同時に火を掛けた天守閣から炎々と燃え上る煙を望んで、足羽山の本陣にゐた豊公は、天守閣に火の手が揚つたからには勝家の滅亡は疑ひないといつて、直に陣營を去つて北國に向つたのであつた。川角太閤記によると、此時豊公は左右のものを顧みて「たとひ一つの天守閣でも、それは實に運を開かん爲めの天守閣である。これ程重要な天守閣に火を掛けたのは、殞落の證據でなくて何んであらう」といふ意味を語られたといふ。

これは天守閣が正しくその城主の運命を象徴し、更にいへば、城主の魂そのものをあらはしたものであるといふ、信念があつたからである。

豊公の柴田征伐

運を開かん爲めの天守閣

天守閣の裝飾とその意義

領主權の發動

安土城天守閣

大阪城天守閣の構築

即ち豊公の時代には、城は最早や單なる防禦の要塞ではなく、平時に於いては、領主權を發揮するところの、力の象徴と見られたので、爲に天守閣には、特に雄偉壯麗な裝飾をも施すに至つたのである。かの信長公の築いた安土城天守閣が、當時の偉觀であつたことは、南化の書いた有名な安土山記に依つても窺はれるが、それにも増して大阪城の天守閣は、雄壯の面目を發揮したものであつた。柴田退治記に依ると、大阪城の天守閣の土台を築いた時には、三十餘國の人数が、遠近の國々から集め來つた大石小石を群り運んだのであつて、その有様は、恰も無數の蟻が眞黒になつて獲物を運ぶのにも似て居り、實に「寔古今奇絶之大功也、皆人驚耳目而已」といふ程であつた。又前記フロイスの記す所に依つても、巍然として雲表に聳え立つたこの天守閣が、金を鏤めて燦然と朝日

大阪陣屏風に見ゆる天守閣

萬人を僥服せしむ

豊公の海外發展の英志を象徴す

に輝いた壯觀を偲ぶに足るものがあるのである。なほ黒田家所藏の前掲大阪冬の陣圖屏風で見ると、天守閣の外側に金色を以て鶴龜の繪が大きく描かれて居る。これは裝飾畫であるから多少誇張はあるにしても、大體その眞相を傳へたものであらう。その豪氣一世を蓋ふた豊公の天守閣であるから、金色燦然として、天を摩する威容は、眞に萬人を攝服せしむる偉觀であつた。

而してかかる壯麗なる外觀は、單に豪華を好んだ豊公の虚榮心の發露と見るべきではなく、國內的には諸侯を威壓し、萬民を心服せしめんとめてあつたにしても、前にもいへる如く對外的には、當時既に豊公の胸裡に鬱勃として湧き上つてゐた海外發展の英志をさながらにあらはしたものとはいはねばならぬ。そしてこれはまた、信長公がこの大阪の地に眼を

現在の天守閣の虎の繪



復大興阪天城守閣勾欄下の伏虎

つけて以來のことであつて、信長公が安土から大阪への進出を計畫して、石山合戦に十一年もの苦辛を嘗めたのも、全く國內統一と海外進出の根據地を求めんとしたからである。

因みに再興された現在の天守閣の勾欄下方には、八方を睥睨する八軀の伏虎が描かれてゐるが、これは昔なかつたもので、再建に當つて安土城にならひ特に描かれたものらしい。上に謹記した明治天皇御製に「虎といふともおそるへし」と豊公を稱へ給ふた事も思ひ合されて、偶然でない様にも感ぜられるのである。

明治以後の日本の發展

それはとも角として、右の如く豊公の海外發展の大志を象徴した大阪城天守閣は、前記の様に元和元年五月八日炎上し、昭和六年再建されたのであるが、ここに再び、明治以後の日本の海外發展と、國威の發揚を願み、豊公偉靈の再來した経過を明らかならしめ度い。

明治の日本と國威の發揚

乃ち明治天皇の御稜威により、日清戦争に大勝を博し、條約の改正を列國に承認せしめて、わが國威が俄然發展するに至つた明治三十一年は實に豊公三百年祭に當つてゐたし、そしてこの頃より豊公に關する史實も漸く學界に知れ渡り、確實な豊公の精神が再認識される時運が到來したのであつた。從來戯曲その他の大衆文學を通じて民衆的に普く親しまれてゐた太閤が、更に識者にもその偉業を熟知せらるるに至り、ここに豊

豊公三百年祭

史實より見たる豊公

公は眞に國民的であり、且つ同時に世界的な英雄として、國民の景仰を受けらるるに至つた。それと共に一面明治以來中央集權制度が確立し、封建的階級制度が撤廢されて、個人の力量が、最も重視さるるに至つた機運と相應じて、豊公はわが國に於ける個性發揚の最大の模範と仰がれたのである。

豊公は個性發揚の最大模範

明治・大正の日本

その後、日露の大國難を克服し、韓國併合の大業を遂げ、又世界大戰に参加したことに依つて、皇國日本は、愈々世界の日本に躍進し、更に昭和に及ぶ間に、内に飛躍的な國力の充實・科學の進歩・軍器の整備を見、外に貿易の異常なる膨脹があり、滿洲國の成立を誘掖する爲には、國際聯盟脱退を辭せざる程、自主外交を主張し得る日本の實力が蓄へられたのである。

昭和日本の發展

豊公偉靈の活動を感得す

天守閣は日本の進路を示す

天守閣西面の意義

かく現代の日本は、世界史上にも稀なる大発展を遂げ得たのであるが、これ等は上記に蘇峰翁もいへる如く、すべて人力を超越した御神靈の働きといはねばならぬ。而してかかる日本の内外の発展の上に、豊公の偉靈も亦強く働いてゐられることは、充分感得することが出来るのであるが、上記の如く、昭和の御大典を永遠に記念する爲に昭和四年二月八日、大阪市會が大阪城天守閣の再建を議決し、尋て同六年、天守閣の竣工を見たのであるから、恰もこの天守閣は昭和の聖世に於ける、日本の進路を明示する運命を持つたものとも考へられるのである。それが厳密なる研究の結果、西面して建てられたことも決して偶然ではなく、西の方大陸經營をめざした豊公偉靈の表はれてあると同時に、昭和の日本が、西の方大陸に進出すべき、大いなる宿命を表徴したものだといはねば

仁徳天皇孝徳天皇の大阪遷都の御意義

四天王寺の意義

豊公の墓も亦西面す

ならぬ。

そしてこれはまた、仁徳天皇並に孝徳天皇が、大陸との交通を思召さ



復興大阪城天守閣

れて、大和から難波に遷都あらせられ、或は飛鳥の昔、聖徳太子が西面せる四天王を安置して、四天王寺を御建立あらせられた聖旨とも、全く符節を合したものであり、今後愈々大阪が西方大陸に向つて興亞の聖業を翼賛する經濟的使命を發揮し、飛躍的發展を遂ぐべき運命を象徴したものといはねばならぬ。

而して京都の豊國廟並に豊公の墓も、昔は何れも西北に向つてゐたの

に、明治の再興に當つては、何れも西向きに改められたことも、豊公の偉靈が、西の方大陸に向つて活動を始められたことを物語るものかも知れない。

豊公の偉業を顧る

されば大阪城天守閣再建當時は、誰しもそれを感知することは出来なかつたのであるが、事實は明かにこれを證明した。上にも記した如く昭和六年九月十八日、即ち恰も豊公薨後三百三十三年の命日(太陽曆)に、滿洲事變勃發し、わが帝國は滿洲國の獨立をたすけ、國際聯盟を離脱して、自主外交を樹立し、明の國書を破り棄てて、皇國の眞面目を發揮せる、豊公の偉業を復興した事は、これ正しく豊公の再來といふべきである。更に上海事變を経て昭和十二年に於て勃發した今次の聖戦に至つては、

時運到来す

滿洲事變勃發の日
は豊公三百三十三年の命日に當る

自主外交は豊公の眞面目

天守閣は祖國日本の意志を明示す

豊公の分靈皇軍將士に乗り移れ

豊公の朝鮮役を顧る

唐入

正しく豊公偉靈の再生と感ぜざるを得ないのである。かくて今や全支に涉つて活躍するわが皇軍將兵の背後に、その祖國日本の意志を明示して、嚴然たる大阪城天守閣が聳え立ち、これを發足地として、豊公の偉靈が幾千幾萬の分靈として、聖戦に従ふ皇軍將兵に乗り移り、現に力限りの活躍をされつつあるものと信ぜられるのである。

いま豊公の朝鮮役の目的を顧るに、豊公は日本・朝鮮・支那の上に立つ大亞細亞を考へ、所謂東亞の新秩序を理想とせられてゐたのであつて、必ずしも、所謂領土的野心と謂ふ様な西洋式功利觀念から出發したものではなく、最後の目的は日支の提携・親善融合・即ち皇道宣布にあつたのであつた。即ちかの文祿・慶長にわたる朝鮮征伐の如きも、唐入と號して、實は明との通商を復興して、國利民福を興さんとし、朝鮮に仲介

豊公の神國日本の自覺

させたのに、朝鮮がそれを承知しなかつたから、朝鮮及び支那を討たんとしたのであつた。しかも豊公は神國日本の自覺に生き、大義名分を辨へた人であつたから、義満の如き屈辱的外交は斷乎として排斥せざるを得ず、遂に



豊國大明神

立つて朝鮮征伐が行はれたのである。加藤清

豊公と大義名分

加藤清正の勇戦

正の勇猛果敢な軍振も、かくの如き國威宣揚の聖戦であつたから、ひろく人口に膾炙するに至つたのである。されば有終の美を遂げ得なかつた豊公の偉靈は、無念を吞んで時運の熟するのを待ち十二分の豫備工作を

豫備工作完了す

今次の戦果と豊公の偉靈

長期建設と豊公の加護

聖戦と皇軍勇士の奮戦

施されつゝあつたものと考へられる。かく考へ来れば今次の支那事變に於いて、果敢なる皇軍將兵が、世界戦史にも稀な戦果をあげ得たのには、豊公の果し遂げ得なかつた無念の偉靈の働らきが、御稜威を扶翼し奉つて、果たし遂げしめられたものともいふことが出来よう。さればかの蔣政権の長期抗戦に對應して、長期建設の大業を完成する爲には、豊公の加護を受けねばならぬことはいふまでもない。しかもその加護を得るためには、吾人は心をこめて豊公を祀らねばならぬことは、前言の通りである。

聖戦と御神靈の加護

抗日蔣政権を膺懲すべき聖戦初まつてより、ここに三年、わが忠勇無雙なる皇軍將兵は、奮戦また奮戦、朝に一城を抜き、夕に一寨を陥れて、

大東亞の建設

東亞永遠の平和
来る

御稜威と皇軍奮
戦の賜

忠勇の發露は御
神靈の加護

正に皇軍の占據地域は、支那の過半にも及ばんとする勢を示してゐる。加藤清正等の朝鮮征伐に於ける奮戦も亦、實にかくの如きものであつたのである。しかも今や戦雲收まつた占據地域を中心として、着々興亞の長期建設が、遂行されつゝあり、東亞永遠の平和が、次第に大きな歩みとなつて來たことは、誠に御同慶に堪えない。これひとへに、八紘一字の肇國精神を以て皇國をしろしめす天皇陛下の御稜威の然らしむるところに外ならず、即ちその大御心を奉戴せる皇軍將兵の奮戦の賜であることはいふまでもないが、かかる忠勇の發露には、見えざる多くの神々の御神靈の御加護が、與つて力あることは、國民の齊しく信じて疑はないところである。

いなむしろ御神靈そのものが、畏きことながら現人神として皇軍を統

御神靈は天皇を
翼賛し奉る

御神靈は大御心
のままに將兵を
助け給ふ

一秒も將兵の心
を離れ給はず

率し給ひ、興亞の大業に邁進し給ふ天皇の御上に集り給ひ、天皇の御働きを翼賛し奉つておはすものと拜察されるのである。そしてまたその御神靈は現人神にまします天皇の大御心のままに、全支各方面より、更に南海方面にまで活躍せるわが皇軍將兵に乗り移り給ひ、その奮戦を助けましますのである。即ち皇軍將士の征くところ、山野といはず、河海といはず、世界の涯まで、御神靈は、影の形に添ふが如く、常に付き隨ひ給ひ、共に歩み、共に馳驅して、或は先達となり、或は後詰となり、或は將兵を慰め、或は勵まし、戰酣となるに及んでは將兵と共に突撃し給ひ、或は共に眠り、共に憩ひ、晝といはず、夜といはず、一秒も將兵の心を離れ給はぬのである。これこそ實にわが皇軍將兵が、最も強いといはるる所以であり、世界戦史にも稀な戦果を收め得た所以である。そしてこ

の御神靈の中には、屢々繰返せる如く豊公の偉靈も亦、大いなる働きをなし給ふものと信ぜられる。

銃後國民への加護

更に皇軍將兵ばかりではなく、銃後の國民の舉國一致の精神にも亦、天皇の大御心を承け給ふた御神靈の御働きがあらはれてゐるのである。

國民精神總動員の實果は神靈の加護

言を換へると國民の心の一致即ち國民精神總動員は、天皇の大御心を奉體するところに實現するのであるが、國民の各自に働らきかけ給ふのは御神靈の力である。大御心を奉戴された御神靈の力によつて、國民の心は上御一人の方に向きかへられるのである。すべて我々の心は、我儘勝手な方ばかり働き、自己の利益にのみ傾きたがるのが常であるが、それを上御一人の方へ向けかへられる力は、御神靈の力といはねばならぬ。我々の個人的な心は、いくら深くほり下げても、どれだけ修養を積んで

上御一人に向ふ心

滅私奉公は神靈加護の現れ

見ても、やはり個人的な私の心でしかない。この私の心を滅して、公に向はしめ給ふのは御神靈の力である。かくて國民の滅私奉公の心は、御神靈の加護の現はれといふことが知られるのである。

御神靈と大和魂

しかもこの御神靈の威力は、世の中に事ある時に一層強くあらはれ給ひ、その力を著しく發揮されるのである。この意味は、上に謹掲した明治天皇の御製にも「世の中にことあるときぞしられける」と宣うた事に依つて、明かに感知することが出来る。

神靈の加護は事ある時にあらはる

興亞の聖主明治天皇神のまもりを感知し給ふ

されば明治天皇は、おろかならぬ神のまもりによつて、兵力・國力共に我國に數倍する露西亞を破り、東亞に於ける安定力たる、興亞日本の基を築かせ給うことが、出来させられたのである。しかも天皇は、神にましますから、神のまもりをあきらかに知り得させられたのであるが、その神の御まもりは、上は天皇より、出征將兵はいふまでもなく、下は山田を守る銃後國

御神靈は大和魂なり

民の一人一人に至るまで、及ばせられたことはいふまでもない。この戦勝を普通にいふ如く、大和魂の力といふならば、御神靈は大和魂として、國民に働きかけ給うのである。つまり御神靈は、靈の力として、魂の力として活動しますのである。

御神靈は總合歸一せる力

而してこの御神靈は、畏れ多くも、わが國開闢以來の皇祖皇宗並びに歴代天皇の御神靈を初めとし奉り、更に全國民の幾十億の先祖の靈力もまた、その中に總合歸一し給ふものと拜察される。

總親和の靈力天皇を扶翼し奉る中心を守る神靈

日本はかつて國初以來、外國から侵されたことがない。これは萬國無比の國體の精華であるが、實にこれは皇統連綿たる天皇を中心として奉戴する總親和の靈力が、天皇を扶翼し奉つたからに外ならぬ。即ち確乎たる中心を守るのに、各個の靈は個にして全であり、全にして個の働きを有し、その分に依つて、皇運を扶翼し奉つたのである。その各個の神靈の中でも、上來述べ來つた豊公の偉靈は、明治天皇もその御沙汰書

豊公の偉靈と皇國の運命

に仰せられた如く、上古列聖の御偉業を繼述し奉る、最も靈驗あらたかな神靈であるから、皇國の運命が自然と開かれてゆき、彌榮えゆくのは、豊公偉靈の加護も亦、大いに力あることを感戴しなければならぬ。

豊公とその時代

而していまや豊公の歴史は書き改められねばならぬ。勿論それは豊公に關する個々の歴史的事實に就いていふのではない。日本の生んだ空前ともいふべき、眞の國民的大英雄の全事業と、その精神力に就いていふのである。

即ち時代は人を造るが、人も亦時代をつくるといはるゝ如く、豊公の如き大人物は、決して時代と引き離して考へることは出来ないものであつて、所謂時代の生んだ英雄なのであるから、時代の精神を確實に把握し、時代の核心を貫く精神の具象と見ねばならぬのである。換言すればかの紉爛たる桃山時代のわが國民の總意を代表し、決行したところに、豊公の偉大さがある

豊公の歴史は書き改めよ

時代の生んだ英雄

桃山時代と豊公

仰げは高し豊公の全容

のである。しかもかゝる時代を現出させる原動力となつたのもまた豊公であつた。

實に仰げば仰ぐ程高き山にも喻ふべき大人物は豊公である。時に白雲去來し、時に密雲立ち罩めて、或時はその半身を、或時はその全容を隠す時があつても、それらの障礙物が風に吹きはらはれた時には永遠に變らぬ不斷の山が仰がれる。豊公に對する國民の見解にもかくの如き起伏があつた。



印 金 公 豊
(りよ書文家田前)

しかもいま昭和の聖世に於いて、わが國

國威八紘に輝く聖世

威八紘に輝き、世界を指導すべき東亞の盟

豊公は蘇れり

主として、毅然たる皇國の眞の姿が明瞭に認識され、國民各自の實踐の上、その皇國精神が躍如として現れ出てつあるの時、御稜威を奉戴して國威を世界に輝かさんとした豊公の精神的全容即ちその偉靈は、愈々高く國民の腦裡に映じ來り、蘇り來るのである。かく豊公の偉靈を仰

豊公の靈乗り移る

分靈の威力

豊公の偉業は總靈力の綜合

ぎ、その内包せる偉大な靈力に打たれた時こそ、實に豊公は、我等國民の胸に、心に蘇つて來るのである。又豊公の偉大な神靈の力が、我等國民を加護せらるるのである。或はこれを豊公の靈力が、我等の上に乗れられたともいへるであらう。而して偉大な靈力は決して單なる一個の靈力で終るものではない。その靈は何萬何億に分出して、その力の偉大さに減少を來さない。否むしろ多くの分靈が、分れて行けばゆく程、その靈力は大きくなる。これを更に考へると、豊公自身も亦決して一個の靈を分有せるものではなく、前にもいへる如く、上、皇室を初め奉り、下、數千數百億のわが國民の先祖の靈力を具有し、更に當時の國民の總靈力を、一身に綜合し代表するの大靈力を、持つてゐられたのである。そこに豊公の大なる靈力が形成され、かくて國史に燦然として輝く大

事業が、自から成就されて行つたのであつた。

豊公の大東亞建設の根據地

豊公生涯の大事業は、文・武、内・外に亘り實に多く、その一を説くにしても、相當の紙數を要するところであるから、別に詳細に説く用意があるが、いまここにこれを大別していへば、内に對しては統一と平和、外に對しては國威を發揚して、當時に於いて知られてゐた朝鮮・支那・印度・臺灣・フィリッピン・南洋諸島等の世界のすべての國を、御稜威の下に打つて一丸とする大皇國を再建設するにあつた。そして勿論當時の知識では、全東亞が全世界であつたのである。前記の唐入即ち大明征伐はその第一歩であつた。

豊公は八柱一字の皇國精神を奉戴す

全東亞を打つて一丸とせんとす

文武内外の大事業

しかもこの内外の兩者を通じて、豊公は終始、八柱一字の皇國精神の

豊公は言擧げせず

豊公は三傑以上

大阪は豊公によつて大東亞建設の根據地たる使命を賦與さる

顯現に邁進したのであつた。勿論豊公は理論家ではないから、これを今日の如き理論で示すことはしなかつたが、すべてそれを實行で示して行つたのである。その點に於いても豊公はすべて「言擧げせぬ」日本獨特の惟神の精神を把握した、眞の日本の英雄であつた。

在來の史家は西洋史上に於ける三傑として、亞歷山大王・ケーザル・ナポレオンの三者を知つてゐるが、我等は東洋に於ける成吉思汗が更に偉大であり、我が豊公に至つては、この四者に比して皇道宣布を使命として海陸兩方面の大經綸を遂行せる點に於て、更に大なる世界的英雄として、選ばれねばならぬと思ふ。

而して豊公は屢々言へる如く大阪を根據地として、大東亞を打つて一丸とする大皇國を建て、わが御稜威を世界に發揮せんとしたのであるから、豊公によつて、大阪は大東亞建設の大使命を賦與されたものといつてよい。この大使命を遂行したところに、大阪の發展があつたのである。更にそれを一層擴大充實して、今後も大いに發展せねばならぬのである。

かゝるが故に、身は平民の卑きより起つて、遂に關白太政大臣に進んで位人臣を極め、以て

大阪に生くる豊公の偉霊

列聖の御偉業を継述して興亞の大業に邁進した大勤皇家であり、大英雄であり、大政治家であり、大商人であり、大藝術家であり、大理想家であつた豊公を偲ぶには、大阪が最もふさはしいのである。即ち大阪にこそ、豊公の偉霊は、最も力強く活動を続け給ふのである。

豊公の偉霊を天守閣の下に祀る

興亞の大業完遂を祈る



志大の公豊ぶ偲に石巨 (石巨の門樓城阪大)

遂せんとする所以に外ならぬ。換言すればわが國家・國民の上に大いなる

而して、かかる國史上未曾有の大人物

の生涯を、その最もゆかりの多い大阪に

偲び、更に豊國大明神としての豊公の靈

力のこもつた天守閣の下に、豊公を祀る

ことは、現時の日本が邁進しつつある興

亞建設の聖業の上に、豊公の如き人材を

得んとする所以であり、更にまた豊公偉

霊の大いなる加護を獲て、この聖業を完

熱禱を捧ぐることは神靈の力を増し給ふ所以

豊公と大阪

る力を致されつつある豊公の神靈を祀り、熱禱を捧げることは、一層その神靈の力を増し給ふ所以であると信ずるからである。

而して今や、大阪がただに日本の經濟的中心として、日本の心臓たる

のみならず、大東亞の大阪として、更に世界の大阪として、躍進を遂げ

つつある現状は、誠に同慶に堪へない。しかし大阪の今日あるはその地

理的位置が、海・陸兩方面に交通の利便も多く、物資の集散に大なる便

利があるからであることは、いふまでもないが、思ふに早くこれに着眼

して、その地理的位置を十分に活用したのは、實に豊公であり、その豊

公の偉霊を留めた大阪城を中心とする城下町から發達したことは、今更

いふまでもない。

大阪に着眼せる豊公

大東亞の大阪
世界の大阪

興亞の先驅者豊公

されば政治的中心たる東京に在して、興亞の天命を發し給ふ天皇の大御心を奉戴實現すべきは、商都大阪の使命である。しかもこの事を今より三百五十年の昔に於いて、既に早く實行せしめたのは豊公であつた。これは大阪に住する何人も、忘れんとして忘るる能はざるところである。

されば最も困難なるべき興亞の聖業の完遂の上に、豊公の偉靈を祀るといふことは、豊公をして興亞の聖業を翼賛せしむる所以である。而して特に豊公を大阪に祀るといふことは、たゞに大阪市民の聖業翼賛を、更に更に十二分ならしむるばかりでなく、豊



京都大佛殿址石

大阪に豊公を祀る所以

大阪人の聖業翼賛

大阪人に靈軀を垂れ給はん

明治天皇の世界發展の大御心に副ひ奉る所以

公に依つて賦與された大東亞建設の根源地たる大阪の使命を、より一層充實せしめんがためであり、更に豊公の偉靈の加護により、大阪人をして東亞の舞台に、より以上の活動をなさしめんとするものに外ならぬ。換言すれば、豊公の靈を更に祀ることは、より一層豊公の偉靈をして、大阪に幸する所多からしめ、その産業力をより發展せしめ、大阪を更に世界的に發展せしめんとするものに外ならぬ。而してこれは上にもいへる如く、明治天皇の大阪城下に豊公を祀れと宣ひし聖旨に副ふ所以であり、又明治天皇の世界發展の大御心を、大阪が奉戴する



右方同

提唱

所以といはねばならぬ。
つまり吾等は、豊公の偉靈をして興亞の建設を翼賛せしめ、より活動あらしめ、更により大阪人、延いて全日本人及全東亞人に幸あらしめんがために、に豊國神社を大造營せられんことを提唱するものである。

大阪豊國神社移建・造營の提唱

大阪府下唯一の豊國社
神域狹隘
豊公の靈に相濟まず

而して現時の大阪府社豊國神社は、規模は小さいけれども、大阪に於ける唯一の豊國社である。それにも拘はらず櫛比する現代式大建築に隠没して、神域頗る狹隘、恰も陋屋に大偉靈を押しこめ奉り、いかにも止むなく義理で祀つてゐるかの如く見ゆるのは、愈々もつて豊公の大偉靈に對して、相濟まざるの感を深くせざるを得ない。
かくては、明治天皇の聖旨も空しく、また大阪市民の最も渴仰せる豊

神靈の威力現るゝ能はず

移建の提唱

神を祀る所以

公の偉靈も、全くその神威を明示し給う機會を、失ひ給うものといはざるを得ないのである。よつて吾人は上記の如き大阪城との密接なる關係に顧み、明治天皇の浪華の城の下にと仰せられた聖旨を奉戴して、豊國神社を更に天守閣近くに移建し、最も壯麗なる桃山式大社殿を造營あらせらるべきことを、聲を大にして提唱するものである。而して心ある大阪人は奮起して、必ずやこの舉に賛成せらるるであらうことを、信じて疑はないものである。

つらつら思ふに、神を祀ることは、神を祀つて幾萬の人々がそれに參拜し、熱誠なる祈願をこむるところに、神の力があらはれるのである。即ち祈れば祈るほど、萬人の祈りの力が神靈の力に加はつて、更に神力は彌増し給うものである。もし如何なる靈驗あらたかな神を祀つても、

神城ふさはしからざらざる時は靈驗を示し給ふ餘地なし

官民有志の奮起を希ふ

何人も參拜せず、或はその神城、規模が狹隘で、神域にふさはしからざる時は、神も亦その靈驗を示し給ふ餘地がない。されば、靈驗もつともあらたかなるべき神は、それにふさはしい神域、規模を有し給ふことが最も大切であるといはねばならぬ。この意味に於いて豊公の神靈を崇敬さるる大阪の官民諸氏の御協力により、豊國神社の移建・造營を完成するならば、豊公の偉靈は大阪の上に一層強く働らき給ふことは決して疑ひない。

目下の急務

而してその御社格の如きも、社殿の御造營が完備するならば、自然に高まり給ふべきものであるから、ただ明治天皇の聖旨を奉戴して實行すればよいのである。とに角目下の急務はまづ豊國神社を移建造營すべきである。これこそ大阪にとつて最も大切なことであり、最も緊急を要す

國にこゝろをつくさしめ給はむ

各地豊國神社の造營又は整備

豊公顯彰はむしろ遅すぎた

しかし今からでも遅くはない
今日より直ちに實行に移したし

ることである。かくて明治天皇が御製にも仰せられた如く、國にこゝろをつくした豊公の偉靈は、大阪人から進んで全國民の上に強き加護を垂れ給ひ、全國民をして國にこゝろを盡す様に導き給ふであらう。

我等の願事

(一) 我々は上記の如く、東京豊國神社創建、京都・大阪兩豊國神社の移轉、造營を完成し、其他名古屋・福岡・長濱等の豊國神社もそれぞれ整備して、此等の豊公に最もゆかり多き神社を、豊公を祀るにふさはしい莊嚴なる神社とし度いと考へる。この外にも豊公に因縁のある遺蹟にして、復興すべきものは、調査の完了次第、適當に復興し、顯彰に努むべきは勿論である。これ等の事業は、豊公顯彰の意味からすれば、あまりに遅すぎた觀がないでもない。しかしながら、今からでも遅くはな

豊公を海外に奉
祀する提唱

い。思ひ立つたが吉日であるから、直ちに實行に移したいものである。そしてこれにはまず大阪が率先して直ちに實行せねばならぬ。上來説き來つたところを熟讀せられた方は、何故に大阪が全國に率先して實行しなければならぬかを、まさしく感得せられたことと信ずる。

(二) 更に今日より直ちに關係各方面に提唱し實行を促したいのは、豊公を海外に奉祀する件である。その祭祀の方法に關する詳細なる意見は、別にこれを述べる豫定である。

(三) 此等の諸事業と共に、豊公精神を顯彰し、豊公精神を徹底せしむる爲には、豊公精神顯揚の一大綜合國民運動を起さねばならぬ。この運動は國民精神總動員運動と完全に一體なる運動であるから、この趣旨の下に文武、内外各般に亘り、大いに國民の士氣を鼓舞すべきはいふま

豊公顯揚の一大
綜合國民運動

豊公三百五十年
祭を迎ふ

でもない。

而して來るべき昭和二十三年は、豊公の三百五十年祭に相當する。この記念すべき年には、右の綜合運動を中心として統制をはかり、その大祭典を、一大國民的行事たらしめねばならぬと考へるのである。

而して我等はここに、國民大衆に對して、一層積極的に豊公に祈れと絶叫するものである。豊公の如き大軍神に祈らずして、いかなる神に祈るべきであらう。よろしく國民大衆は熱誠こめて、ひたすら、皇軍の大捷を豊公に祈るならば、興亞の曙光は、さはやかに全東亞の上に射してくる日も亦、遠き將來ではあるまい。

國民大衆は積極
的に豊公に祈れ

豊公精神の顯彰と發揚

右の一大綜合運動によつて、豊公の偉靈を眞に全國民に徹底せしめ、

豊公の降鑑と加護を得せしめむ

國民ごとくこの大英雄の偉靈の降鑑と、加護とを得せしめたいと考へるのである。然らば世界も亦豊公を認識し、かかる英雄を生んだ日本を一層尊敬するであらう。

國につくすまこと

而して繰返していふが、これは實に、明治天皇がその御製に「國にこころをつくすこの人」と稱揚し給ふた、豊公の國につくしたまふことを顯彰せんとするものであり、また豊公の如く、國民各自に奉公の赤誠をいたさしめんとするものに外ならぬのである。

人としての豊公

思ふに、人としての豊公は、また天衣無縫の明朗なる自然人であり、親に仕へては至孝、妻子に對しては至愛、對人關係に於いては至信、恰も日本晴の天空を腹中に置いた様な、巧まず飾らざる天真爛漫の人物であつた。人口に膾炙して、最も國民に親しまれる太閤の眞面目は、實に

豊公は天真爛漫の自然人

機智縦横の大家者

この大氣者たるところにあるのであるが、しかもその機智や縦横にして、一度計畫を立つれば、頗る綿密、殆んど常人の端睨すべからざるものがあつたことも、人のよく知るところである。

豊公は盡忠至孝の人

かくの如く、豊公は公人としても、私人としても、盡忠至孝を以て終始し、早く東亞の大勢に着眼して、國策を遂行し、躍進日本の先驅者となつたのである。されば興亞の聖業に邁進しつつある現時の日本に於いては、かくの如き大人物こそ、最も待望さるべき人物でなければならぬ。

躍進日本の先驅者

最も待望さるゝ人物

豊公の偉靈を祀り、その遺蹟を明らかにし、その史實を確かめ、その精神を顯彰することは、時局下の日本に於いて最も必要な、かかる人物を待望する所以である。即ち上記の徳富蘇峰翁も「皇室中心主義の根本義」と題する講演中に「國家は、黄金のみで生きるものではない。金よりも

蘇峰翁の卓見

金よりも人、人よりも魂

本當の人間の魂が一國の魂となる

豊公の偉靈全東亞に蘇らん

人である。人の身體よりも其人の魂である、精神である。本當の人間の生命・魂・精神が茲に一國の魂・一國

の精神となるのであります。』(蘇峰會誌昭和十四年第一輯所載)

といつてゐる如く、豊公を奉祀することはまた、豊公魂即ち豊公精神を體得せる、眞の日本人を作る所以である。

而して、豊公を祀るべしといふ大なる聲が、上記の如く豊太閤と最も深い因縁のある東亞の大經濟都市たる大阪から起つて、全東亞の津々浦々に及ぶならば、蓋し豊公の偉靈も亦、一層力強い神靈として、全東亞に



京都阿彌陀峰頂上豊公の墓

豊公精神は即ち奉公精神

大東亞の地圖は興亞色に塗りかへらる

豊公を祀れと絶叫す

蘇り來ることであらう。かくて興亞の長期建設が、完全に遂行せらるべきは疑のないところである。

即ち豊公精神は、換言すれば奉公精神であるから、かくの如き奉公精神の發揚を志す我等の微意も亦、國民精神總動員の趣旨を體し、肇國以來の忠靈を顯彰し、興亞の聖業を翼賛し奉り、皇國の彌榮を希ふより外に、毫も他意なきこと勿論である。大東亞の地圖が日に日に興亞の色に塗りかへられつつある光榮の日に當り、敢て滿天下の諸士に向つて『豊公を祀れ』と絶叫する所以である。

桃山文化の復興を期す

以上縷々として、豊公を祀らねばならぬ所以を力説し、豊公の偉業を顯彰し、一層豊公神靈の加護を仰がんがために、國民的一大綜合運動を

世界史上に輝く
桃山文化

起すべき趣旨を述べ來つたのであるが、この運動が澎湃として、大東亞の天地に捲き起る時、ここに我々は、世界史上に絢爛たる光彩を放つたわが桃山時代文化の復興を、期することが出来るのである。

短を捨て長を採
る

もつとも所謂桃山時代は、豊公を中心とする前後約五十年の時代を意味するのであるが、これを更に擴大して、その短を捨て、桃山文化の特徴を、眞に昭和の聖代に復興し、再生せしむることは、大御代の榮を一層増し奉らんとする微意に外ならぬ。

桃山文化の特徴

いま最も簡略に桃山文化の特徴を述べて、その復興の齋す實果をあぐるならば、凡そ左の如くであらう。

社會は元氣に満
つ

(一)桃山時代は分裂しきつた戰國時代より、統一の機運が大成された時代であるから、雄大豪壯の元氣が社會に満ち、大國民としての日本人

大國民としての
日本人の面目

の眞面目が發揮された。そしてそれは國內のみならず、海外にも發揚され、ここに日本人が八紘一宇の皇國精神を奉戴して、眞に世界人として活動し得たのである。而してこの元氣潑刺たる日本人の意氣込は大東亞の盟主として、その永遠の平和を確保せんとする、今日の日本の使命の上に、最も大切な原動力となるべきものと信ぜられる。

金銀産出の時代

商賣繁昌産業股
賑を極む

興亞の聖業は産
業から

(二)國史上桃山時代程、金・銀等の産出の夥しかつた時代はない。従つて當時の日本の産業の發達は、前古にその比なく、經濟は豊かに商賣は最も繁昌した。即ち我國に於いて、産業の最も股賑を極めた時代としては、桃山時代と現代とを、國史上に於ける二大時期とすべきであらう。興亞の聖業は産業から、といはれるが、その産業の發達を願ふならば、桃山時代に復古し、その時代を指導した豊公の意氣込を以

文藝復興の時代

て、産業の開發に邁進しなければならぬ。

(三) 桃山時代は文化史上、太古よりの純日本精神が、最も顯著に復興した時代である。即ち所謂文藝復興の時代である。日本文化の眞面目を發揮して、世界文化に寄與すべき昭和の日本に、桃山文化を復興して思想・文學・繪畫・彫刻・藝術その他各般の日本藝道より、武道・體育に至るまで、日本的なものを一層盛大ならしむることは、精神日本が世界を指導し世界に貢獻する所以である。しかしそれは排他的であつてはならぬ。桃山時代の如く氣宇豪壯、最も包容的であつて、しかも大和魂を中心にしつかりと持つたものでなければならぬ。

天皇中心主義と豊公精神

精神日本世界指導

其他述べれば限り無いものがあるが、今は上述の程度に止めて、最後に、天皇中心主義を奉じた豊公の精神を顯揚することは、祭政一致の國

祭政一致の國風を發揚
國史に基づく國民士氣の鼓舞
忠靈顯彰國體明徴運動

風を奉戴して、眞に桃山文化の復興を期するものであり、同時に光輝ある國史即ち正しき事實に基づいて、國民の士氣を鼓舞せんとする最も具體的なる忠靈の顯彰、皇道歴史の建設即ち國體明徴運動であることを強調して擱筆する。

生ける豊太閤 (終)

395
327

生ける豊太閤



昭和十四年七月廿五日印刷
昭和十四年八月一日發行

實價壹圓

不許複製

大阪市東區住吉町五二番地

著者兼
發行者

鳥井信治郎

印刷人

大阪市北區木幡町五九番地
谷川

印刷所

大阪市北區木幡町五九番地
谷川印刷所

發行所

大阪市東區住吉町五二番地

豐

公

會

電話大阪東一六四二番
振替大阪五一二三番

終

